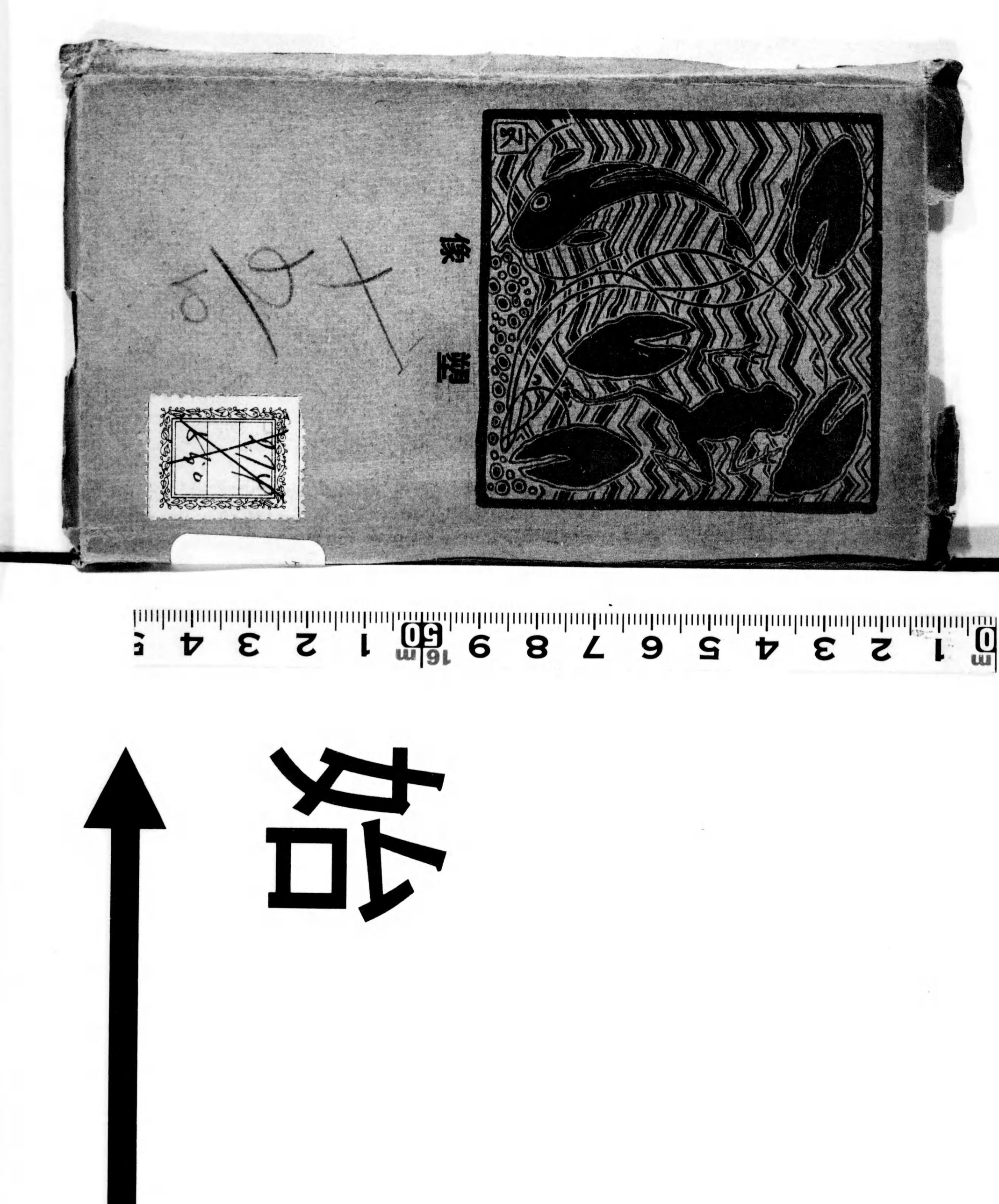
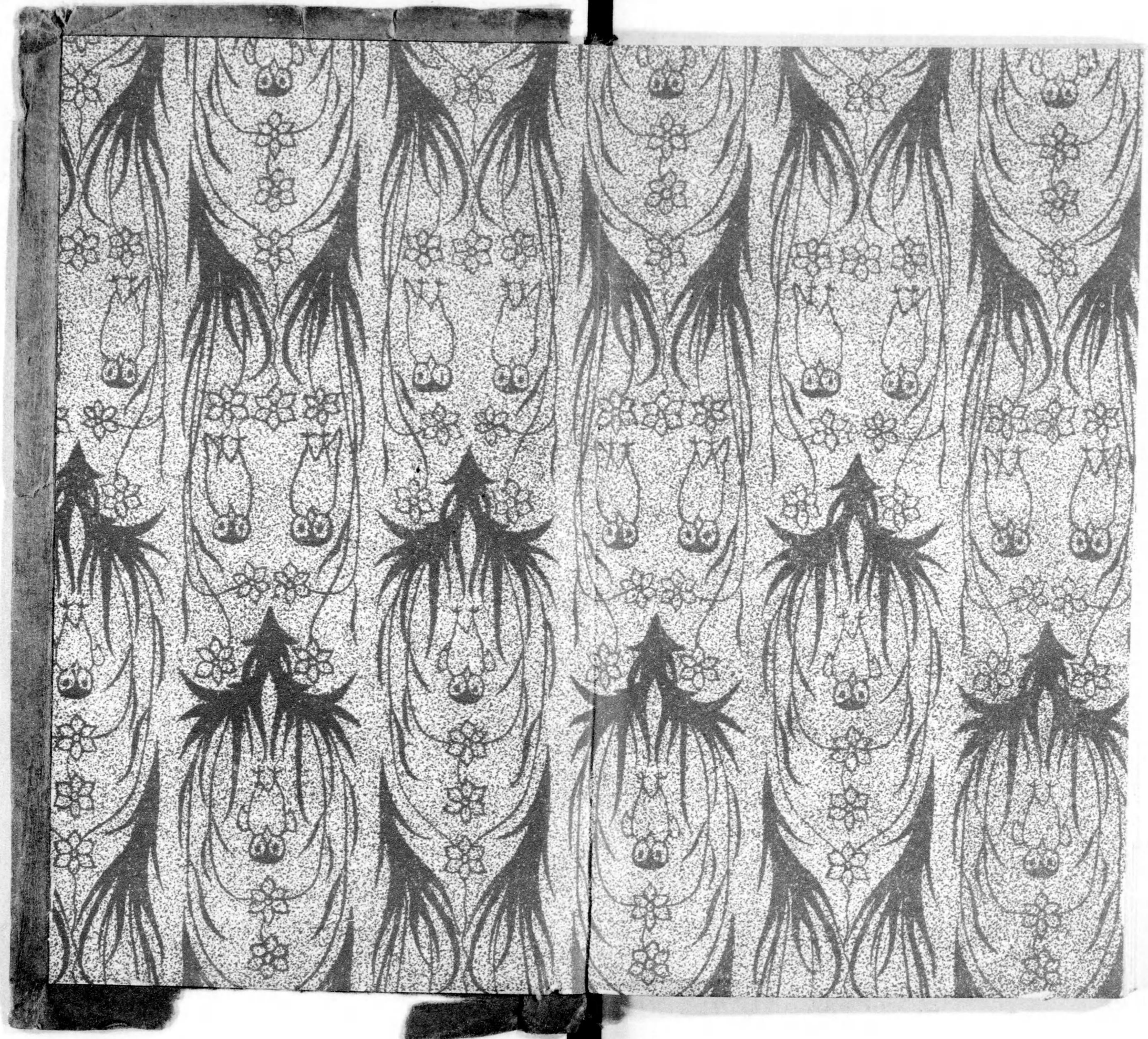

俳諧
松本

塑　　像

979
540



現代文藝叢書

第三十七編

佐藤緑葉

塑像

散文詩　十八篇

詩　二十六篇

大正
3. 5. 21
文內

特101
487.

この書に集めた散文詩と詩とは、たいてい此兩三年前後の作に屬して居るが、中には、四五年前、相州下浦の海岸、又は東京月島に住んでゐた頃の作も混つてゐる。すべて、闇の中に住み、光を怖れ、光を望んでゐた自分の心持に、多少の關係がある。

千九百十四年五月

綠葉

目次

塑像……二
街の荒野……六
ペラホの夜……一一
闇のなか……一九
Mrs K——の眼……二八
少年の家出……四七
仔犬……五七
子供の顔……六七
黒い帆の船……七五
無花果の實……八〇

怪獸……八三
工場より歸る群集……八五
日向ぼっこ……八八
睡眠……九二
灯の街へ……九六
幼い芽……一〇〇
廣い國へ……一一〇
ある男の死……一二七
詩二十六篇……一六四

散文詩及び小品

塑　像

彼は黒い眼鏡をかけて、靜かに私の前へ來て立つた。それを見ると私は急に全身に惡寒を覺えた。立つて逃げ出さうと私の心は頻に焦つた。しかし私の腰はキュションにひたと吸ひ付けられて了つた。

青い細かい霧が靜かに私の顔に吹きつけるやうな氣持がした。そして私の身體から温かさが次第に何處へか逃げて行くやうに思はれた。

彼は黒い眼鏡ごしに、頻に何物かを求めるやうに首を振つた。丁度產れたばかりの嬰兒が、明るい窓の方へ向いて小さな首をふるやうに……

……。

彼の身體は細そりとして、まだ成熟しない少年のやうにしなやかに見えた。けれども彼の纏ふてゐる着物は、丁度喪服のやうに眞黒であつた。そして玻璃のやうに蒼白い手を出して、黒く塗つた拄杖にしつかりと摑まつてゐた。

「何處かで見たやうな子だ。」

と、私は思つた。私の心の中をこんな子が、コト〳〵と杖をついて歩いてゐるやうな氣持がした。私の心は寂しくひそ〳〵と愁ひ出した。

と、不意に何處かでけたゝましい物音がした。と、彼の耳は、獵犬が其主人に從ふ時のやうに、聽くその音をきゝ漏すまいとした。けたゝましい物音は、遠くの海で波の音が微かな風に泣くやうに、間もなく優し

い音樂と變つた。それは近所の青い建物の二階から漏るピヤノの聲であつた。しかし彼の耳はなほ夜の番犬のやうにそばだつてゐた。

私は横から彼の顔を覗いて見た。そして今更のやうに驚いた。黑い冷たい眼鏡の奥には、鳥の薄膜のやうな白眼が眠つてゐた。青い賢こい空のやうな瞳はどこへ隱れたのか、その上には白い薄い雲が一面にかげをなしてゐた。

私はいつまでも、じつと彼の眼鏡の下を見つめてゐた。

丁度太陽が濠の向ふの街の屋根に落ちるところであつた。煤色の雲が赤く微かに燒けて、灰色の靄が一面に空を被ふてゐた。鼠色の緞帳が靜かに舞臺へ下りるやうに、黄昏はこそ〳〵と街の上を被ひ始めた。どこかの高い建物のがらす窓が黄色くキラ〳〵と輝いて、その光が流星のやうに街の空へ消えた。

その時不意に私のゐる四角な部屋に電燈がついた。其の淡青い光は瀧のやうに窓の外へ流れ出した。すると黑い眼鏡の少年は、顔を電燈の方へ向けて、眼鏡と上瞼の間から熱心に光の方へ眼を注いだ。しかし蒼褪めたその白い顔は、まるで彫塑のやうに寂しく艶がなかつた。

音樂はいつの間にか消えてしまつた。そして黑い闇は次第に濃く、窓の玻璃戸の外へ押し寄せて來た。私は身にひし〳〵と寒さを覺えた。

彼はいつまでも光を見つめて居たが、やがて俯向いてホッと溜息をついた。その溜息は、溫室の紅い花も散る程に冷たかつた。

街の荒野

午前二時を過ぎること二十五分。――彼は煉瓦の建物の多い街の方から、黒い水の深く重さうにたゝえてゐる濠を越えて、この寂しい、廣い通りへ歩いて來た。

眼に見えない薄い膜が、輕い水蒸氣にしつとりぬれて、一面に空を被ふてゐるやうに思はれる晩だつた。星は泣きさうに青くふるへて、二つ三つ森の影のやうな暗い天に光つてゐた。彼はしめつた土に吸ひ付くやうな靴の音を響かして、胸を壓しつけるやうに眞黒に立つてゐる鐵橋の下をくゞつた。この鐵橋の下を通る時、彼の頭は自づと何物かにおさ

へられるやうに感じた。

どこからも、何の音も聞えて來なかつた。靜かな眞空(しんくう)のなかのやうなむなしい感じが、そのあたりにも、彼の胸の中にもひろがるやうに思はれた。

ふと、彼は何物かの音をきゝつけたやうに思つた。忘れてしまつた聲――それは併し赤い電燈をつけて、十里も二十里も先へ行き過ぎて了つた電車の音が、記憶のなかの道を微かに明るく照すに過ぎなかつた。

それは彼のごく幼ない頃に起つたことであるか、また何かの書物で讀んだことであるか知らない、とに角、彼はたゞひとりで、古い深い鑛山の坑の中へ入つて行つた事があつた。手には其根を白い紙で卷いた一本

の蠟燭を持つてゐた。そして足の先で道をさぐつて、深く奥へ〳〵と辿つて行つた。その時のやうな心持で、しかし灯も持たず、彼は眞暗な街の荒野を歩いて行つた。

鐵橋の下を過ぎてから餘程たつてから、彼は明るい一つの殿堂の前へ來た。丁度それは水族館へ行つた時のやうな氣持であつた。幾枚かの玻璃の障子は、ぼんやりと白く水氣に曇つて、その中に數十個の電燈は快活さうに光つてゐた。

彼は窓に身を寄せて、じつと家の中をのぞき込んだ。

そこには數十人の人が居つた。みんな黒い衣服をきて、木の高い机の前にうつむいて、何かものを書いてゐる者もあれば、うづ高い紙切をえり分けてゐるものもあつた。この家の高い欄間にかゝつてゐる文字盤の大きな圓い時計は、長い針を十分のばして、もう二時三十五分の所をさしてゐた。

彼はこの家の前を離れて、初めて、自由な、落ち付いた、自分に歸つたやうに思つた。何物も自分の心にわだかまりを與へるものは無いと安心した。

一日の仕事——午後六時から夜の十二時を過ぎるまで、一刻の餘裕をも彼の心に與へぬ勞働から、今始めて解放せらるゝといふ心安さ。それに何の影をも心に投げられない靜かな自由な時を、彼は始めてこゝに味

ふのであつた。彼は大膽に首をあげて、強いはつきりした足どりで歩いて行つた。

夜は一刻一刻に地の上に重なつて來た。それでも天のどこかへ走り去つて、幾つかの雲につき當つた光が、まださまようてゐると見えて、この都會の眞中に建つ大きな鐵骨の建物を、彼の右手にぼんやりと描き出した。この建物の生れ出る事を、丁度春の日の草の伸びて行くのを待つやうに期待してゐる彼は、じつとして懷しく其淡い輪廓に眺め入つた。晝間、幾百人の人がこの建物の傍を通り、また幾十人の技師が、多數の職工をして、この建物の柱に、梁に、赤く燒いた鐵の釘を打ち込んでゐるに反して、今はたゞ彼一人の期待を感謝するものゝやうに、建物はじつと彼の前に横つてゐた。

ふと彼は、その日の晝間もこの建物の傍を通つた事を思ひ出した。その時彼は一人ではなかつた。長い間爭ふて別れてゐた女と、どうした機會で和睦したのか、その日も或る橋の所で待ち合せて、この建物の方へ歩いて來たのであつた。

「それではねえ、あすこはどう、そらあの郊外の……鳩の澤山ゐる……」

その時女はなれ〳〵しいやうな、しかし自分の事ではないやうな顏をしてから云つた。

「さう」と彼は答へた。「あすこはいゝかも知れない……あなた行つたこ

とがあるのか。」

「えゝ二度ほど、私ね、あすこでお酒を飲んだことがあるわ。」

「さうか、それではいやだ、あの××と一緒に行つたなんて、そんな思出のある所はいやだ。」

彼は少し激して、さも堪へられないやうに大袈裟に云つた。

「さう、そんなら私もあなたのいふ所はいやだわ、あんな騒がしい所、それにあなたも前に誰かと一緒に行つた事があるんでせう！」

女は小さな足で小刻に彼に追ひすがりながら、せわしさうな呼吸をついて一緒に歩いてゐた。三四年も前に森へ行かうと云へば森へ行き、野へ行かうと云へば野へ行つた女が、どうしてこんなに意地悪な、欲しい物を見せてゐて容易に與へないやうな者になつたのかと彼は驚ろいた。そしてその瞬間どうしても自分の意思に從はせようと思ひ込んだ。

昔に變らぬ女の横顔は、夕暮の薄い光りの中に、白いボアのやうに煙つて見えた。彼は其頰に鋭いナイフを突き刺して見たいと思つた。

「ねえ、それでは二人の云つたどつちでもない所にしよう、何處か少し離れた……」

「……」

女は答へずに、誰か外に待つてゐる人でもあるやうに、いそがしく歩いてゐた。

「いけないのか。」

「いゝえ、行つてもいゝのだけど……私ね、それではきつと……持つていらつしやいよ。」

女はそれぎり外の事は語らなかつた。そしてあはたゞしい人込を押し分けて、公園に近い十字路から、その小さい身體をすばしこく電車に乗せた。

忘却はこの頃の彼に最も親しい友達であつた。その忘却が彼を幸ひして、午後六時から眞夜中を過ぎるまで、彼に彼女を思ひ出させる隙を與へなかつた。

今、彼は彼女の小さい姿を其記憶の面に浮び出させた。彼女の聲は彼の耳に新らしいラッパの音のやうであつた。けれども彼は、本當の事を云へば、今の彼女と餘り多く交渉する事を好まなかつた。それよりもずつと遠くにゐる、あの獨逸の酒場の、足先で踊りを踊つてゐる娘のやうな頃の女を、默つて眺めてゐたいと思つた。

「むかうから拒つてくればいゝ。」

彼は朧げながらかう思つた。そして鐵骨の大きな建物が、次第に彼の後ろの方に遠くなるのを心安く思つた。

青インキで塗りかためやうな街の荒野は、次第に彼の眼の前に廣くなつた。總て無限であると同時に瞬間であつた。くらやみの細い湯氣のやうな霧は、頻に彼の眼鏡を曇らせた。

たゞ一點の光――いやそれは空間の同じ高さにある幾つもの點の連續した一條の光であつた。その光は暗い海の沖に見える只一つのポスフオラスのやうに、遙か彼方の柳の影から彼の眼に泌み入つて來た。靜かな航海を樂しむ旅客のやうに、彼は其光のくる方角へ歩いて行つた。

光のくる所は第二の濠の岸であつた。そこには柳の木が長い列を作つて立つてゐた。彼が其根の所に近づいて行つた時、輕い呼吸のやうなものがその頰をなでるやうであつた。長い間冷い風に吹きさらされてゐた小い芽は、いつとはなしに薄赤くふくれて、春の來るのを待つてゐるのであつた。

第二の濠の水は初めの濠の水よりも幾分か澄んでゐるやうに見えた。靜かな其面は、玻璃の器にもつた水のやうに、動かず深くたゝえてゐた。天鵞絨の布の奥に隱れた星が一つ二つ、そのエナメルの水の底に瞬いて見えた。

彼の心持は何とも云ふ事の出來ない、たゞ何物かに感謝したいやうな念に滿ちみちた。それは生存といふ事に對する感謝ではない。勿論神に對しての感謝でもない。たゞひとりであるといふこと、心も身體も何物にも煩はさるゝ事の無い寂しさの喜びが、胸の底の方で小さな太鼓を打つてゐるやうに思はれた。

「有難い！」

と、叫びたいやうな氣分になつた。彼の足は輕く地にふれて、濕つた

土をおしつける靴の音が快く耳にきこえた。彼は外套のポケットに深く兩手を突つ込んで、そこの街燈の角を濠に添ふて左に折れた。

氣をつけて見ると、彼のほかにも街を行く人が無いのではなかつた。折々黑い影のやうな物が、彼の傍をかすめて通り過ぎた。是等の人は蝙蝠が濠の石垣に消えてゆくやうに、ハッと思ふ間にどこへかその姿をかくしてしまつた。

彼は旅人のひとりと道づれになりたいと思つた。しかし旅人は、岩の間の船蟲が人の足音に驚いて海の中にすべり込むやうに、いつも幽靈のやうに、その影をどこにか消してしまつた。家に殘して來た幼兒が重い病にかゝつたので、是等の人達はそこへ急いで行くのではあるまいか、何となくかう思つて彼の心持も忙しくなる事があつた。

風はいつまでもその呼吸をとゞめてゐた。どこかで美くしい女が忘れられない夢を見てゐるやうな夜更けである。彼は初めて本當に廣いこの世界の側に立つてゐるやうな氣持がした。

丁度その時である。街の端と思はるゝあたりから、ゴーン、と美くしい朗かな鐘の音が響いて來た。その音をきくと、彼の全身の血は一時に洗はれたやうに涼しさを覺えた。

鐘の音は消えるかと思ふ程微かであるが、しかもはつきりした明るさをもつて響いてきた。その一つ一つの浪のひろがりにつれて、曙の光が

街の屋根の彼方に――地平線の下にふくれてゐるやうに思はれた。彼は外套の襟を立てゝ、じつとその音をきゝながら歩いた。

ペラホの夜

若い女の瞳のやうな薄ばら色の黄昏が、一しきり紫色に輝く公園のアーク燈の影で縺れあつてゐる。池にはさま〴〵な光の影が映つてゐる。その光の影が、眞中の噴泉から落ちる水滴の餘波で、チラ〳〵キラキラと碎ける。碎けてユラ〳〵とどこかへ漂ひ去る。赤、青、黄、緑――緑色の羞むやうな灯影、それ等の灯かけが一つ一つの玉になり、其の玉が長く延び、横に擴がり、そしてうねう〳〵と細くうねつて、漆色の水の底に消えて了ふ。と、そのあとへまた幾筋かの光の柱が漂ひ湧く。

胸の鼓動と、潮のやうなあたりのどよめきから起る底深い噪音と、妙

に一致したメロジアスなコーラスを唱へ出す。池の中の光の柱が一つ消える。一つ映る。また一つ消える。疲れきつた肺臓は「フー」と深い溜息を吐く。

「おい、どうかして呉れ！」

眠つたやうに頭をたれて、池に面したベンチに顔をうづめて居た一人は、突然生欠伸(なまあくび)をかみつぶすやうな聲で云つた。

その同じベンチと、その隣りのベンチとに蹲つてゐた他の三人の男は、いづれも少しづゝ頭を動した。

「アーウ」

と、一人は欠伸をした。

「とう〳〵暮れたのか……」

と、他の一人は溜息をつくやうに呟いた。

神經のゆるんだ、彈力のなくなつた、蒼黄色(あほきいろ)い顔をつき合せて、四人はものも云はずベンチから立ち上つた。四人の五感は、すべての周圍の物とかけ離れてゐるやうに思はれた。

「兎に角どこか行かう。」

と、云ひながら、其の中の一人はフラ〳〵と歩き出した。

「どこへ行くんだ。」

併しこの問には誰れも答へる者はなかつた。

三人は肩を並べて、一人は二三歩おくれて、モップのやうにぞろ〳〵

と歩き廻つてゐる群集の中に入つて行つた。

四人の疲れきつた聽神經へ、時計の槌がゆるく卷針を打つやうに、またヂョーカァが騷がしく板の間で踊るやうに、あたりの白く高い洋風の建物の中から、何とも分らない音樂が響いて來た。風の吹くやうに忙がしく、不思議な音樂は、洋館の中から濁つた闇の中へ去り出した。この白い建物の狹い入口には、どれにも青い洋服を着た、顏に塗つた白粉の上に黃色いほこりのつもつた若い女が佇んでゐた。思ひも寄らぬ寒い國へ運ばれて來た鸚鵡のやうに、漸く覺えた一つ二つの言葉も口に出さず、若い女達は皆だまつてゐた。

「入らつしやい！、入らつしやい！」

と、白い洋館や青い洋服の女にふさはしくない、唐棧縞の半纏を來た壯者（わかもの）が、さゝくれた聲で呶鳴り立てた。

濁つた光と、濁つた音と縺れ合つてゐる夜の無い道を、四人は口もきかないで歩いて行く。四人の眼はハッキリ明いて居りながら、一つとしてまとまつた物を見ない。たゞぼんやりと見張つてゐる硝子のやうなカメラの中へ、白い顏をして、獸のやうな眼付をした少年のむれや、また生の秘密を覗き見たげに、落ちつかない少女の派手な姿などが、映つては消え、また映つては消えた。

白い建物の盡きる所から、道が三つに分れてゐる。右と左は大通りで、前の細い通りは暗い軒燈の出てゐる幾つもの少さな家に添うてゐる。こ

の通りの入口の左側に、環をなして多くの人が集つてゐる。眞中に長い髪を脊にたれて、赭い顔をした三十位の男が、カンテラの油焔に半面を照らされながら、濁つた聲で何か喋つて居る。その皺嗄れた荒んだ聲は、四人の中の一人の神經へ、茨の荊棘で搔いたやうな痛みを起させた。

「……人魚の肉を喰べた者は……蒼い顔の人魚の肉を喰べたものは…」

と、いふやうに、其言葉はどこか不思議な國の恐ろしい物語りをきくやうに、何とも云へない聯想をおこさせた。

併し三人は物も言はないで、其のわきの暗い露地へ入つて行つた。冷々とした暗い露地の空氣は、マンモスの洞に住む眼のない小さな魚が、ひつたりといはやの壁に吸ひ付くやうに、四人の膚にすぐさましがみついた。

「おゝ！」

と、急に其中の一人が叫んで、そこに立ちどまつた。他の三人も驚いてそこに立ちどまつた。

四人の眼の前には、白い洋館のイルミネーションから流れる青い闇の中に、ばら色の半身を見せて、多角形なスカイスクレーパーが立つて居る。それは丁度闇の世界を守つてゐるやうに、そして又灯の街を喜ぶやうに、おだやかな微笑をその面に浮べて立つてゐる。

四人は始めてこの塔を見るやうに、何とも云へない驚きの色をその顔に浮べて、呆然と青い闇の空を仰ぎ見た。三角の帽子を被つた小さな子

供や、豆のやうな形をした輕快な小僧や、青と赤の縞のズボンをはいた奇妙な子供や、いろ〳〵な形をした光と音との踊り子が、飛んだり、はねたり、宙返りをしたりして、ぞろ〳〵とばら色のほの明るい光道を、洋館の方から斜めに塔をさして走つて行く。活動寫眞のフィルムが卷きほぐれて行くやうに、四人の眼には不思議な光景があり〳〵と映つた。

四人の眼からは急に霞がとれたやうな氣がした。そうして今までもや〳〵してゐた頭へ、あたりの音や聲がはつきり響くやうになつた。

"Come here, my sweet heart."

その時不意に耳元の障子の中から、澄んだ小鳥のやうな鳴き聲がきえてきた。……

闇のなか

長い、懶い一日を、何のあてもなく歩き廻つたあげくの事である。

疲れ果てた者の、なほ疲れを追ひ求める心を以て、私は、ふと私の眼の前にひらけた暗い洞窟へ這入らうとした。洞窟の入口は狹くて暗かつた。しかしその奥には、多くの蒼白い人魚の群と、何だか知れない秘密の歡樂とがあるやうに思はれた。

私の後腦は、終日の疲れに魚の鰓のやうに紅くなつてゐた。そして一足歩くたびに、私の眼は——天地はくる〳〵と廻るやうに感ぜられた。

と、不意に、私は……私の手は、ある軟らかな温かい手に掴まれた。

驚ろいて引込めやうとした時は、私の身體は、もう前の方へ曳かれて倒れさうになつて居た。

私は眼を閉ぢて、足許を探りながら、こわ〳〵曳かれる方へついて行つた。

「こゝに居らつしやい。」

赤いインコの鳴くやうな聲が、私の顏と同じ位な高い闇の中で起つた。

私はまた驚いて眼を見ひらいた。けれども外の明るい光に縮まつて居た私の瞳は、この闇の中へ來て、俄かに擴ることは出來なかつた。その間に私の傍に居た赤いインコは、すうとどこへか消えて了つた。

すると、急に私はむせるやうな温かさと、壓迫とを肌に感じた。ざわ〳〵と多くの人の動くやうな氣合、煙草の烟と、ほこりの臭ひ、さういふものが、暗い部屋一ぱひに漲つてゐるやうに思はれた。

私の瞳孔は次第に擴がつて來た。それにつれて、今迄一樣に黑い闇だつた洞窟の中に、いろ〳〵な光が漂ふてゐる事を認めた。

どこかの隅には、淡青い光がこつそり潜んでゐた。また一方の隅には、髑髏のやうに褪せた白い光が漂ふてゐた。そうして部屋の眞中と思はるゝあたりは、殊に强い光が、闇の中に編をなして漂ふてゐた。この强い光は、部屋の後の方の小さい四角な穴から來るので、その光の道は、二十度位の角度をなして、次第に先の方が擴がつて居た。

私はその道を辿つて、前方の壁に强い光の繪を見つけた。

併し私の眼がまだ其キラ〳〵と光る映畫になづまない中に、私の頭は、私の耳の鼓膜が破れるかと思ふ程、騷がしいワルツの曲にかき亂された。

それは、この暗い部屋の、一段高い所に陣取つてゐる樂隊の一團から起つたのである。

私の眼はすぐその方へ誘はれた。

漸く闇に馴れた私の瞳は、微かにその一團の人の輪廓を見分ける事が出來た。殊にその一團の上には、外側（そばがは）を青く塗つた笠の電燈がついてゐるので、環のやうな大喇叭や、トロンボーンなどが、金屬性の光を照りかへしてゐた。

五六人の樂手は皆脊を圓くして、銘々の樂器を打ち鳴らしてゐた。馴れきつた簡單な樂譜を、日と何十度となく繰り返すので、彼等には町音樂隊ほどの熱心も見えなかつた。締りのない大きな樂器の口からは、修練のないホローヴォイスが遁れ出した。

しかし私の疲れた心は、それ等の亂雜な音樂に、ある種のハーモニーを感ずる事が出來た。放縱な投げやりの氣分は、強い酒に醉つて狂ひさわぐ狂人の群のやうに、私の耳の中で黃色いダンスを初めた。

闇の中には、言葉のない言葉が漂ふてゐるやうに思はれた。獸のうめくやうな聲や、女の私語くやうな聲などが一緒になつて、潮のやうな渦紋が四角な部屋の中にゆれてゐる。

重い、濁つた空氣は、次第に部屋の中に一ぱいになるやうに思はれた。

そして強い光と饐えたやうなほこりとで縞をなしてゐる光道を、煙草の煙が渦を巻いて亂してゐる。

私の心は丁度その闇の中にふさわしかつた。で、濁つた空氣の中へ、眼も、鼻も、口もそのまゝ投げ出した。

しかし疲れきつた私の心は、しばらく闇の中にゐたので、思の外靜かになつた。そして何を考へるでもなく、ぼんやりと眼をあいたまゝ、このリーヂユアタイムを貪つてゐた。

ふと、私の耳は、騷がしい樂隊の中に、ある澄んだ音樂をきいた。じつと耳を傾けてゐると、その澄んだ音樂は、微かではあるが、他の騷音にかき亂されずに、はつきりと闇の中から聞えてくる。

私はまた樂隊の方へ眼をやつた。

すると、さつきまでは氣が付かなかつたが、私はその一團の中に一人の女樂手の居るのを發見した。女樂手は一團の眞中に立つて、手にクラリネットを持つてゐた。顏はよく見分ける事は出來ないが、肩や胸の恰好がいかにも若さうな曲線を描いて居た。黑いびらうどのやうな洋服の胸に、卻であらうか、折々電燈の光に銀色を放つものがあつた。

女はペンギン鳥のやうに胸をつき出して、まるで一團のコンダクターのやうに威張つて見えた。さつきの澄んだ音樂は、この女のクラリネットからひゞくのであつた。

私の眼は、一種の好奇心から、暫らく其女を離れなかつた。

女樂手の白い指は、青い電燈の下で、こざかしく樂器の上を走つた。ごく單純な曲を吹いて居りながら、其態度は、一世の天才が、晴れの樂壇に立つた時のやうに見えた。

私の心はいつの間にか、その女と、その女の周圍の者との間に、一つのローマンスを描いてゐた。

他の五人の樂手のラッパは、其女のクラリネットに曳かれて行くやうに思はれた。自墮落に身を持ちくづした男達が、その女の前へ出ると、わけもなく首を下げてゐるやうにも思はれた。

「併しあんな連中の中にゐるのだから、とても眞面目では居られまい……。」

と、私の心はどこかで呟いた。

すると、急に其女の暗い歴史が、私の想像の奥をおびえさせて、ひえ〳〵と女樂手のかげを被ふやうに思はれた。私は眼を閉じて、そして又見ひらいた。その時、樂隊の囃しは一層騷がしくなつた。女樂手はまるでクィンのやうに立上つて、忙しくそのクラリネットを吹き鳴らした。胸に懸けた銀の鎖は、一層キラ〳〵と闇の中に輝いた。その樣子はオーケストラに指揮棒を振つてる人のやうに思はれた。

正面の強い光の中では、今、長い劍を下げた若いナイトが、大きな森のかげで、美くしい少女と戀を語つてゐる——。

Mrs K——の眼

明るい電燈の光と、暖かなストーヴの火を見捨てゝ、私はその建物から外へ出た。Unter den Rinden Straase に似てゐるといふ背の低い街には冷い雨が靜かにしと〳〵と降つてゐた。そして漸く芽をふき初めた歩道（サイドウオーク）の柳の蔭には、蒼褪（あをざ）めた瓦斯の灯（ひ）が粉（こな）つぽく煙つて瞬いてゐた。

私はぬれた舗道（ペーブメント）の上を、疲れた心持で歩いて行つた。私の重い足から響く靴の音が、顔にふれてゆく濕つた空氣を透（とう）して、快よく耳を打つた。

夜はもう餘程更けてゐた。私の記憶の中には、今出て來た建物の廣い部屋にある大きな時計が浮んで來た。その時計の面を這つてゐる西洋人の脛のやうに長い鐵の針は、時のために稍々黄ばんだ蠟盤の面にあるXII といふ字を指してゐた。

私は「ホッ」と溜息をついた。

そして何となく濕つてゐる外套の衿に頰をうづめて、またこつ〳〵と歩きつゞけた。

雨の夜だけに、街燈の光にすかしても、街にはもう人の影は見えなかつた。この街に東洋らしい特殊の色をそえる Yomise のカンテラも、元より雨の爲めに見る事は出來なかつた。美しい Fancy Goods を並べた多くの店々は、もうすつかり大戸をおろして、軒並に冬のやうな休息に入らうとしてゐた。

その夜の凡そ二時間程前に、この都の或る歡樂の巷に人殺しがあつた。それは或る一人の女のために、他の二人の男が斬り合ひをしたのであつた。私は私と同じ仕事の仲間の、既に夜の勤を終へて中途まで歸つて行つた友達を呼びかへして、この事件の顛末を調べて貰はうと思つた。

友達はまだ其家へ歸らなかつた。夜は更けてゐたが、途中の或る家に立寄つて、そこで話し耽つてゐる事を私は知つてゐた。

友達の寄つてゐる家の主人は、この國の新らしい劇の運動に携はつてゐる人であつた。そしてまた其夫人は、或る有名な劇場の歌劇部の Prima-donna であつた。

私はその夫人が——假にK夫人としておく——まだ今の歌劇部に入らない前に、矢張舞臺の上の人として、二度程同じ劇場で見た事がある。それは日本にまで有名になつたある外國の脚本が演ぜられた時であつた。K夫人は其中の中世紀のある王妃（クイン）に扮してゐた。

そして其夫の紅い大きなマントを着た王（キング）と共に、ビザンチン式の王座に座つてゐた。……やがて舞臺の下手にもの〳〵しいケワイがして、髮を縮らした二人の若い武士が入つて來た。そして王座の前に膝づいて、何事かの報告を齎らした。その時夫人の王妃は夫の言葉の後について、

「ローゼンクランツ、ギルデンスタアン……」

と、其廷臣の名を呼び、朗かな聲で慰勞の言葉を述べた。

其の時K夫人の細い、しかし透明な聲と、稍々下顎を前へつき出したfigureとは、私の記憶に忘れる事の出來ない烙印を捺した。それから間もなくK夫人は、何かの事情で今の歌劇部に籍を移した。

私は友達を訪ねて、かゝる夜更けにK夫妻の家へ行くといふ事が、一種の輕い喜びであつた。

で、仕事に疲れた身體と、反射的に昂奮した心とを以て、その家の方へ足を急がせた。

ふと、もう無くなつたと思つた電車が一臺、後の方からまつしぐらに走つて來た。そしてこわれた古い箱でも叩くやうな響を兩側の街に投げかけて、無恰好な身體を左右に搖りながら、忽ち私の左側を馳せ拔けて了つた。間もなく其微かな赤い電氣の光は、暗い街の遙か彼方に消えて行つた。

騷がしい音の不意の打擊に驚いた私の耳の皷膜は、そのあとの忘れたやうな靜けさに怪しみの眼を見張つた。その時大きな寺で撞く釣鐘のやうな響が、地の底まで泌み渡るやうに、水蒸氣に罩められた街の空氣をふるはした。

とある街角の屋根の上にある大時計は、心細げな電氣の光の下に、午前零時三十分をさしてゐた。

私は間もなく、目ざすK氏の家に訪ねついた。そして親しい友達にあつて、私の來意を告げた。

「さう、それぢや行かなきやなりますまい……」

と、友達は快よく私の頼みを承諾してくれた。そしてK氏との愉快な會話を打ちきつて、すぐ外套を着て立上つた。

「一寸、君は折角來たのだから少し遊んで行つてもいゝでせう。」

友達は私の名を呼んでから言つた。しかし初めて會ふ人に對して、どうしても思ふやうに會話をする事の出來ない私は、強いて友達と一所に出やうとした。

「それぢやァ、君をこの家の人達に紹介して置きませう。」

私は友達のこの言葉に、初めてしみ〴〵とK氏の家の中を見た。私の眼の前には女の髪を飾る赤や紫の切(きれ)や、美くしい鼈甲(べつかう)の細工物などが列(ならべ)てあつた。それ等の品物を容れた低いがらす戸棚の後ろに、私は驚くべき二つの黒い瞳を發見した。私達と同じ人種の中に初めて見るマチスの瞳！

私は挨拶もそこ〳〵に、友達と連れ立つてK夫人の家を出た。そして友達と肩を並べて、冷たい雨の中を歩き出した。しかし私の心の中にはK夫人の大きな瞳と、ある歐文雜誌のK夫人の屬してゐる歌劇部を評した文章の一節とが交る〳〵往來した。

"Madame S— sang some musical arias, and the duet between Japan's

leading soprano and Mrs K— was very good indeed."

少年の家出

ある暖い春の朝、政吉の家の裏の垣根の下に、小さな草の芽がポツカリ顔を出した。毎日空は緑色の寢床のやうに晴れた。ある日の風は、こつそり隣りの家の塀をのり越えてきて、くすぐる樣に若草の薄い袖を吹いた。初めは銀色であつた其の芽が、次第に溜息をつきながら萠黄色にほぐれて來た。

政吉は毎朝縁側に出て、惱ましい顔をして其の草の芽を見た。程近いK——公園の方から、風に連れて一片二片の櫻の花びらが垣根の中へ散り込んで來る朝など、殊に政吉は名も知れない悲しみに襲はれた。政吉

の幼い胸の中に芽ぐんだ惱みは、朝毎に、草の芽のはぐれて行くやうに伸びて行つた。

教科書の包と、小さな辨當箱とを持つて、政吉はいつも勢よく學校へ行くのであつたが、それすらも此頃は厭ふやうになつた。幼ない時からの習慣になつてゐる、父や母への挨拶さへ怠るやうになつた。そして裏の縁側へばかり出て、ぼんやりと伸びて行く草の芽などを眺めてゐた。

「政ちやん、もうお行でなさい、お父さんはさつきにいらつしやいましたよ。」

その朝も政吉が縁側に出て澁つてゐるのを見て、母親は障子の中から聲をかけた。

「えゝ……」

と、返事はしたが、政吉はすぐ立ち上らうとしなかつた。父が政吉の行く小學校の校長であるといふ事は、政吉にとつては可成心の苦しみであつた。併しそれが爲めに彼の沈んだ心を引立る事は出來なかつた。

「今日は何だか具合が變で困ります。」

と、障子ごしに母に告げて、政吉は自分の書齋ときめられた玄關側の四疊半に引き込んだ。

稍々南に廻つた午前の春の日は、庭にも縁側にも一ぱいに射して、障子に糸のやうな陽炎の紋を織つてゐた。政吉は赤く上氣した顔をして、じつとそれを見つめてゐたが、頭の心がズキ〳〵と痛んで來たので、靜

かに冷たい机の上に顔を伏せた。

政吉は全身の細胞の溶けて行くやうな倦怠さを覺えた。明るい日の光にすかして見ると、その少年らしい兩手の肌に青い靜脈がふくれ上つて其の底を生命と云ふものが脈を搏ちながら流れてゐるやうに見えた。

ふと政吉は、前夜更けてから、父と母とが其の寢室に於て、政吉の事に就いて話してゐた會話を思ひ出した。政吉は眠れないといふ事を覺えた此頃、じつと襖越しにその總ての會話に耳を欹てた。

「貴郎……」と、其時母親はさゝやくやうな細い聲で云つた。「政吉はこの頃どうかしてるやうぢやございませんか。」

「どうかしてゐる？私には別にどうにも思はれんがの。」

夜具の袖にでも包まれたやうな父親のさびた聲がきこえた。

「でも何だか、毎日〳〵冴えない顔ばかりして、あんなに學校の好きだつた子が、この頃では朝も出しぶるやうになりましたよ。」

「おかしいねえ、學校では別にそんな樣子も見えないのだが……。」

「そして始終何か考へてるやうな顔をして、私が用事を言ひ付けてもまるで耳に入らない事があるのですよ、前には決してそんな事はなかつたのですが。」

「さうか、それはおかしいねえ……。」

「……」

政吉は益々きゝ耳を立てたが、それから後はよくきゝとれなかつた。……もしや自分が中學校へやつてくれと云つた、その事を母が云ひ出しはすまいか、そして母はそれに就てどういふ意見をのべて呉れるであらうか……、全身の神經を耳にして、襖の向ふに注意を集めたが、それぎり父と母との言葉をきく事は出來なかつた……。

政吉は何とも云ひ得ない厭はしさと、重苦しい疲勞とを覺えた。そして自分の心の上に展けて來た不思議な、新らしい世界に眼を見はつた。風に吹かれた海のやうに政吉の心はゆれてゐた。毎日學校へ行くと云ふ事のいとはしさや、父や母と一緒にゐると云ふ事の惱ましさが、更る交る心の上に顔を出した。

「本當にいやだ！」

彼はしみ〴〵から思つた。そして學校の先生や父などから幾度も云つてきかされた、淺草公園などにさまよつてる不良少年の群などが慕はしくなつた。それ等の少年の一群を、政吉は近くのB――活動常設館の入口に見た事などを思ひ出した。

活動寫眞の聯想は、政吉の眼の前に忘れる事の出來ない一つの映畫を持ち出した。それは佛蘭西の巴里に起つた事であつた。…一人の美くしい少女は佛蘭西の南の方の某ステーションから、一口の短刀をかくし持つて巴里に入り込んだ。其時はフランスの全國民は革命といふ血腥いギ

ロチンの音に戰慄してゐた。少女は其時ギロチンの綱引であつたマラァに面會を求めて、其の浴槽の中に人々の敵である兇漢を刺した。……明るく、痛く、フィルムの影に浮動する少女の姿は、少年の政吉の心に、スプリングのやうな昂奮を與へた。

「家を出たい。」

眩暈に痛む政吉の頭に、かういふ考がする〳〵と忍び込んだ。

政吉はつと立上つて、そつと間の襖を開けて次の室を見た。さつきまでそこに居た母親は、どこへ行つたか見えなかつた。で、政吉は再び靜かに自分の居間へ歸つて、小さな一閑張の机の前に座つた。そしてジクテーション用の罫洋紙を出して、Gペンに赤インキを含ませ、ジッと左の手で頰杖をついた。

陽炎は相不變靜かに障子の下の方にもえてゐた。花も眠氣を催すやうな靜かな春の晝で、遠くの方から薄絹に包まれたやうな電車の音がきこえて來た。

「父上、小生は獨立いたしたく候……」

と、政吉は紙の上にペンを走らした。が、考へて、其の上を赤く丁寧に塗りけした。そして紙を改めて、またペンを執つた。

父上、先日お願ひした中學校の事は、とてもお許しがないだらうと思ひます。私はどうにかして自分の力で偉い人になりたいと思ひます。電車道で新聞を賣つて勉强してる子供もある位ですから、私も自分で

働いて偉くなつて歸りたいと思ひます。どうか私の行く先を探さないで下さいまし。そして父上も母上も御丈夫でお暮し下さい。政吉。

から書いて、急いで封筒を出して其の中に入れた。そして封をして自分の机の抽斗の中に入れた。

それから政吉は立ち上つて、いつも學校へ行く時つける袴をはいた。本箱の奥から墓口を出して、それを懐の奥にしまつた。そして小さな櫻草の徽章のついた制帽を被り、

「行つて參ります。」

と、勢よく誰にともなく挨拶して、しかし再び歸らないつもりで、玄關から春の日の暖くまぶしい街へ出た。

仔犬

緩(ゆる)く流れる濠割の水がどんより澱んで、底に沈んだ軟らかい泥の間から、小さな氣泡が二つ三つ水の面へ浮いて出るやうなある日の午後、飼主のない一疋の仔犬が、どこかの露地裏から、ふら〳〵と街の通りへ這ひ出して來た。

仔犬はもう幾日も食物にあり付かなかつた。飼主の無い爲めにきまつた御馳走を食べられないばかりか、どこの塵芥捨箱(ごみすてばこ)を覗いて廻つても、いつも意地惡な子供などに追ひ立てられるので、落ち付いて腹のふくれる程食べた事は之迄に一度も無かつた。で、饑と不安とにびく〳〵しな

から、たえずあたりに氣を配つて歩いて行つた。

街角の交番の灰色に塗られたボックスに、「管内の野犬狩を行ふ……」云々と云ふ掲示の張られた時には、この孤兒の仔犬は、何となく自分の上に落ちかゝる危險な氣配に感ずいて、ある大きな家の縁の下へ奥深く隱れて了つた。筒袖の外套の衿の處に太い鐵の棒を隱してゐる男や、サーベルの音をガチャつかせる巡査などが、この家の周圍を徘徊した時は、仔犬は縁の下の暗い所で呼吸もつかずに震へてゐた。

それから後は、仔犬は餌をあさりに出るにも、一層周圍に心を置くやうになつた。そして街の通りをうろついてゐる時に、主人に曳かれて意氣揚々と歩いてゐる毛並の美くしい犬を見ても、自分と同じ種族に屬して居るものゝやうには思はれなかつた。仔犬は兄弟もなく、仲間もなく、いつもたゞ獨りで寂しさうに街をうろついた。

何か小さな音でもすると、仔犬はあはてゝ立ちどまつた。そして恐怖と疑ひとに滿ちた眼を上げて、ぢつとその音のする方を凝視めるのを常とした。その音が自分に危害を加へるものでないと云ふ事が分ると、仔犬は又よろ〳〵と歩き出した。

仔犬は又誰に媚びるともなく、折々其小さな尻尾を振つた。細い見すぼらしい尻尾を弱々しく振る所は、いかにも恐怖に滿ちて居るやうに見えた。痩せて骨ばつた四つの足の動く所を見ると、蒼白い精神病患者が狂人病院の長い廊下を歩いて行くやうに思はれた。

空は鉛のやうにどんよりと曇つて、低く街の甍の上に被さつてゐた。濁つた空氣は少しも動かずに沈みきつて、あたりの工場の煙突から出る毒瓦斯が、次第に其中へ熔け込んで來るやうに思はれた。

頭痛持の待合の女將の顳顬に幾枚も梅ぼしが張られて、今にもヒステリーの發作を見さうな日和であつた。街を歩く人の顔色は皆灰色に見えた。どれもこれも不眠症にかゝつて、朝の味噌汁も咽喉を通らなかつたやうな顔色に見えた。中には一週間も徹夜したやうな顔色をして、力のない瞳の少しも動かない男もあつた。

仔犬は折々心配さうに顔をあげて、新富町の角を濠に沿ふて南の方へ歩いて行つた。

彼は時々「クン、クン」と鼻を鳴らして其邊を嗅ぎ廻した。物に驚き易いその眼の中には、見捨てられた者の恐怖と、うるんだやうな溫順な色とが浮んでゐた。

掃除の行き屆いた濠端の道には、仔犬の飢を滿足させるやうな食物は落ちて居なかつた。それでも仔犬は、自分を妨げる者のあまり通らないのを結句喜んで、うろ〳〵とあてもなく其邊を探しまわつた。所々にある荷揚場の、石材や木材を積んである所などは殊に念入りに探した。

「クン、クン、……」

と、折々石の間などに鼻を入れて心細さうに呟いた。

仔犬が濠端から新富座の裏通りの方へ曲らうとした時に、そこの角の空地に、酒屋か炭屋の御用聞らしい小僧が二人立話をしてゐた。小僧達はお互にめくばせを取り交して、いきなり飛びかゝつて、何の氣も付かずに餌を探してゐる仔犬をつかまへた。

「キャン、キャアン……」

と、不意の襲撃に驚いた仔犬は、悲鳴をあげて二人の手から遁れやうともがいた。

けれども二人の小僧は離さうとしなかつた。そして何處からか細い繩きれを見つけて來て、其先へ何かの鑵詰の空鑵を結びつけ、更にそれを仔犬の尻尾に結びつけた。仔犬は何をされるのかと、生きた心地もなく、眼をパチ〳〵させてじつとしてゐた。

その時、小僧達は不意に仔犬の尻をピシリと打つた。

「キャン！」

と、仔犬は一聲高く悲鳴をあげた。そしてくる〳〵と二度ばかり廻ると、元來た道を一散に駈け出した。尻尾に結び付けてある空鑵は、堅い地にふれて、ガランガラン〳〵と高く鳴つた。

「キャン！　キャン！……」

仔犬は益々高く鳴いて、あらん限りの速力を出して走り出した。すると後ろの鑵は尙ほ大きな音を立てゝ鳴つた。その音が仔犬の耳には、恐ろしい鐵の棒の捻るよりも尙ほ怖しく感ぜられた。そして尻尾をひつぱ

る細い繩が、今にも自分を撲殺する人間の手のやうに思はれた。

新富町の電車通りへ出ると、往來の人や、車や、馬の足音などが繁くきこえて來た。その人や、車や、馬などの足が、數限りもない林のやうに仔犬の眼に映つた。仔犬は電車通りを東に向つて命限り走つた。尻尾の空鑵は電車の敷石にふれて、前よりも一層高く仔犬の鼓膜を襲うた。

「キヤン！　キヤン！……」

たとへやうもない心細い悲鳴をあげて、仔犬は又電車通りをひき返して來た。

仔犬の瞳の色はすつかり變つて了つた。

黑と白との斑の、見すぼらしい動物は、烈しいヒポコンデリーに襲はれて、家の角や、電柱や、道端の石などに幾度もつき當つた。そして烈しく撥ね返されて、其度に悲鳴をあげて、方角も定めずに走り出した。

腐つた猫の屍骸の流れる濠割の上を、ごみ臭い風がこつそり吹き初めた。京橋新富町のあたりの乾いた道の上を、小さないくつものつむじがくる〳〵と卷いて走り去つた。重い水銀のやうな雲はまだ空を閉してゐて、濠割の水は灰汁を流したやうに白く光つて見えた。

通りすがりの人々は、仔犬のけたゝましい鳴き聲に驚いて皆立ち止まつた。其立ち止まつてゐるのを見て、後から來た人も亦立ちどまつた。そして一樣に仔犬の走つて行く方を見守つた。

半ば氣の狂つた仔犬は、なほも悲しさうに鳴きつゞけて、京橋家畜病院の前通りを一散に走つて行つた。

子供の顔

夕陽(ゆふひ)があたつてゐる。

室の障子はあか〳〵と照つて、恰度溫室のやうに暖かい。

室には若い妻と若い夫とが、向きあつてゐる。二人の顔は逆上(のぼせ)たやうに紅い。殊に女の顔が紅い。薄い皮膚の下に、紅い血の動くのが見えるやうに思はれる。

若い妻は膝に生れてから間もない嬰兒(あかんぼ)を抱いてゐる。あかんぼはすや〳〵睡つてゐる。髮の毛の眞黑な兒だ。色はもう白くなりかけてゐる。煙のやうな眉の下には、貴い品物のやうに眼瞼がそつと閉ぢられてゐる。

鼻が割合に高い。折々口を動かすので、軟かい頬が凸(たか)くなつたり凹(ひく)くなつたりする。

若い妻はじつと兒の顔を見つめてゐる。

若い夫は兒の天窓(あたま)のぷく〳〵と動く所を見つめてゐる。

「毛まで動く。」

と、若い夫が云つた。

「え？」

何の事か女には解らなかつたと見える。

「そこが動くぢやないか、それ、その顋門(ひよめき)が。」

若い夫は口で兒の天窓(あたま)をさして云つた。

「まあ、こゝの事ですか。」と、女は呆れたやうに云つて、「それよりかこの顔を御覽なさいよ、こんな可愛い顔をして寝てるわ。」

若い妻は堪らないと云ふやうな風をして、自分の頬をあかんぼの頬へすりつけた。そして音をさせて唇を吸つた。

その拍子(へうし)にあかんぼは泣き出した。

顔の筋肉が軟からに動いて、やがて眼と鼻と一緒になつたのが分れた時に、「オギャ」といふ聲が出た。

同時に手と足とを動かし初めた。派手なメリンスの着物のあたりがぷく〳〵と動いた。白と紅の鮮かな縞柄が夕陽の室に浮き出した。

「おゝよし〳〵×ちやんはいゝ子だねえ、泣くんぢやありませんよ。」

若い妻はさゝわけのある者のやうに、あかんぼの顔をのぞき込んで云つてきかせた。そして大切さうに其の身體をゆすぶつた。

併しあかんぼは泣きやまない。

×ちやんはよい子だ眠んねしな

ねんねして起きるとお乳あげるゥ……。

今度は小さい聲で子守歌を唄つた。

それでもあかんぼは泣きやまない。一層大きな聲をして泣き出した。

「先刻お乳をやつたばかしだのにねえ、どうしたのそんなに泣いて……

……。」若い妻はあはれみに堪えないやうな顔をして、「お父さん、何か歌を唄つて頂戴！」

「何をそんなに泣くの！」

若い夫はぢつとあかんぼを見てゐたが、これも義務だといふやうな顔をしてから云つた。

「さあ歌を唄ふから泣くんぢやないよ。」

そして初めに藤村集の「椰子の實」を唄つた。若い夫は詩を唄つて兒を眠らせるのを常としてゐる。外には端歌も子守うたも知らないのだ。

唄つてる中兒は泣き聲をやめた。歌が終るとまた顔をしかめてぶすぶすと言ひ出す。

若い夫はその次に「山のあなた」を唄つた。それから「海のあなたの遙けき國へ」や「小諸なる古城のほとり」などを唄つた。

唄つてるうちにあかんぼはすや〳〵と眠つて了つた。

併し若い夫は興に乘じて、「廢園」の詩や、「獨り歌へる」の歌などをいくつも朗吟した。

若い妻はうつとりときいてゐる。

障子に當つてゐる夕陽は、室の空氣の中をふは〳〵と舞つてゐるやうに思はれる。

「この兒の顔は詩ねえ。」

突然若い妻が言つた。

「何？」

「この兒の顔は詩よ、私には確かに詩だわ。」

若い夫はだまつてゐる。何か言ふべき事を見出さうと思つてゐるらしい。

「うん、さうかも知れない。」

暫くしてから、男はつかぬ聲で言つた。

「さうよ、それからこの兒の息は音樂だわ、この香ひには音樂があるわ。」

「そりや口の中に殘つてる乳汁の腐敗した香ひだ。」

と、若い夫は其痙せた頰に笑を浮べて云つた。

「いゝえ私には音樂よ、まあこの香ひをかいで御らんなさい。」

若い妻は深く信じてゐるやうな聲でかう言つた。

「この兒の眠つてる顔を見てゐると、何でも皆詩や音樂になるわ、貴郎

の顔でも、室でも夕陽でも……。」

夕陽はまだ障子にあか〳〵と照つてゐる。庭の植木に避(さへぎ)られた所には、チラ〳〵といくつもの圓るい渦紋を描いてゐる。

若い妻は一心にあかんぼの顔を見つめてゐる。若い夫はぼんやり妻と兒の顔を見並(みくら)べてゐる。二人の顔はまだ逆(のぼ)せて紅くなつてゐる。

黒い帆の船

祕密の施律にうち顫ふ海の色は黒い。狂氣じみた風の吹き渡る日は、亂醉した騷音が地下室のやうに低く垂れた雲に反響する。丁度それは墓穴の底の亡者共が勝手氣まゝにダンスをする足音のやうにきこえる。

三日つゞいた嵐の死んだ日、疲れて吐息してゐる波の上を黒い帆を上げた船がすべつて行く。――船は何處から來たのか、また何處へ行くのか分らない。蒼い額に汗をかいたやうな波は、いつまでも……億萬年も默つてゐるやうに俯向いてゐる。

沈默(サイレンス)！

併し船はすべつて行く。黒い帆を力一ぱいに張つて、静かに、そして冷かに、一定の針路を取つて走つて行く。行きかう船は、其の黒い帆を見て遠く避ける。

海中の岩礁に一群の鷗が翼を休めてゐる。彼等は首を傾けて黒い帆の船を眺めてゐる。航行の船を歓迎するに馴れた是等の禽類も、暫くは孤疑して動かうともしない。

疲れた海。

黒い帆の船。

蒼い波はひた〳〵と船の足を洗ふ。けれども黒い帆の船は、深い沈默をつゞけて、聲もなく、遠い雲の下へ走つて行く。

惱亂と、陰鬱とに勞れた他の多くの船は、草臥れ果てた波を煽動して、折々、

「日光！」「日光！」と叫ぶ。

其の時、岬の上を覆ふてゐる大鳳の翼翅のやうな雲が破れて、溶銅のやうな夕陽が忘れた夢を見るやうに現はれた。黄色い藥液を流したやうな光線が、爛れた烟のやうに海の上に漂ふ。

すると、今まで沈みきつてゐた多くの船が、俄かに喜びの聲をあげてさんざめく。あちらでも、こちらでも、白い帆の船が肩を搖つて笑ふ。

併し黒い帆の船は、疫病にかゝつた黒い手のやうに、默つて疲れた海を走つて行く。時計がセコンドを刻むやうに、また惡獸が己れの巣へ歸る時のやうに、靜かに、そして悠々と走つて行く。

黒い帆の船はいつまでも走つて行く。

猩紅熱を病む患者が、重い首をあげて吐息するやうに、沈む日は金茶の雲のベットから海を覗き見る。疲れた波は驚いて幾度か身震をする。と、其蒼い波頭の上を眞紅な光が渡つて行く。

鷗は驚いて何處ともなく姿をかくし、漁船は濱に散る貝殼のやうに漂ふてゐる。

そして多くの白い帆の船は、いづれも航路を陸地に近くとつて、己が指す港口へと急いで行く。

けれども黒い帆の船は、見捨てられた蝙蝠のやうに、暮れかゝつた海を靜かにすべつて行く。燈臺に灯がつくまで……、水平線に黒い夜の鳥が現はるゝまで……、祕密の施律に嘆く海の上を……。

無花果の實

灰色に乾いた道が長くつゞいてゐる。それは丁度、知らぬ村から、知らぬ町へ通じてゐるやうに見える。年の若い一人の男が頭を垂れて其道を歩いて行く。

右手の小さな丘の上から、薄黄色い日光が力なく射してゐる。何處からか逃げて來たやうな風が、折々一團となつて通り過ぎると、砂塵が其度ごとにあはてゝ舞ひ上る。

片側の町並では、古い甍の入つた赤壁などが震へ出した。ある店頭の駄菓子の箱には、其蓋の上に恐ろしく塵埃が積つてゐた。煤けて黝ずんだ板の間に日の光が照つた。そこには子供の足跡が二つ三つ着いてゐた。

彼はふと立留つた。そしてぼんやりと瞳孔の開いた眼で、しかし敵の樣子でも窺ふやうに眺め入つた。

彼の眼の前には大きな無花果の實の爛れたのがあつた。しかも二つあつた。いづれも紫黒色をして、膿んだ腫物の傷口のやうに口を開いてゐた。紫の膿汁が今にも流れ落ちさうに思はれた。それを見てゐると、恐ろしい病毒が今にも血管から侵入して、全身に汚ない吹出物でも出來さうに思はれた。曾て濱邊で見た事のある烏貝の實を思ひ出した。

彼は思はず首を縮めて身顫ひをした。

と、其瞬間、熟した無花果の實はすうと消えた。そして四十許になる

男と女とが彼の眼の前に現はれた。二人共銅色の弛んだ頬をゆがめて、互に顔を見合せて笑つた。そして如何にも疲れ果てたやうに二つ三つ欠伸をした。

彼はそれから何事も已めやうと思つた。……

怪　獸

ある晩、突然何か來て胸の上に跨つた。

彼はそれを拂ひ除けやうとして身をもがひた。しかし怪物はなか〳〵去らうとはしなかつた。軟らかい身體をひたと彼の胸に吸ひ付けて、もがけばもがく程だん〳〵胸のあたりを強くしめた。

怪物の身體はたゞ黑かつた。大きさは横に彼の身體の二倍もあつて、縱は彼の頸から膝まで位であつた。顔は伏せてゐるから分らないが、何處が手だか足だか見分けが付かなかつた。しかも十數貫の物を載せられたやうに、彼は冷汗を流して身をもがいた。

「怪獸！」

と、彼は叫ばうと思つた。しかし咽喉がつまつて、どうしても聲が出なかつた。

一瞬々々に呼吸が苦しくなつた。非常な恐怖と、その恐怖から遁れたいといふ焦慮とから、彼は釜の中で煮られる者のやうに苦悶した。

思はず呻吟いた拍子に、彼はぱつちり眼を見開いた。

そして人間の白血球を盗み去る怪獸が、今しもあはたゞしく逃げて行つたかのやうに、彼はじつと闇の中を見送つた。

工場より歸る群集

午後四時の汽笛が悲しげに鳴ると、痛いやうに冷たい風が、濠端の道をそゝくさと吹いて過ぎた。

濠端に沿ふた工場には、煤けた赤い煙突が何本も立つてゐた。其工場から今鳴つた汽笛を合圖に、無數の勞働者があふれ出した。門の內側には人の善ささうな、顏の長い門衞が一人立つてゐた。勞働者は其前を通る時に皆機械のやうに一寸首を下げた。それは丁度此世の中の合言葉といふ調子であつた。

門を出た群集は、皆同じ方面へぞろ〳〵と歩いて行く。街の屋根の上

に輝いてゐる夕陽は、其弱い光を斜に彼等の上に投げた。群集の影は長く工場の板塀に映つた。

皆元氣の無い顔をしてゐる。多くは古道具屋の店にでも並べてありさうな大黒帽を被つてゐる。帽子を被らない者は髪を亂したまゝにして、蒼い力ない額を風に吹かせておく。洋服を着て下駄を穿いた者もある。裾丈の揃はぬ衣服を着て大切さうに辨當箱をかゝへてゐる者もある。皆前こゞみになつて、丁度葬列のやうに默々と歩いて行く。

その中には曾て華やかな戀をした事のある者もある。村の誰彼を羨ましがらせて、手を携へて東京へ駈落をした者も有る。それから光ある世界を夢みて、失意の身をこの社會へ墮した者もある。丁度手傷を負ふた獸が藪の中へ隱れるやうに、人知れず此群に身を投じた者もある。

併し今の彼等の眼にはどんなものが映つてゐるだらうか。

じめ〳〵した暗い三疊の間に、蒼ぶくれになつた妻の顔や、ピー〳〵泣く營養不良の子供などを想像してゐる者もあらう。『酒！』これより外に何も思はない者もあらう。或る者はまた眼を細くして、白いものを顔に塗つた、すぐに賤しい事を口にする女を思つてゐるだらう。

併し彼等はお互に少しも口をきゝ合はない。そして『明日』といふ事を考へる氣力もなく、ぞろ〳〵と各々の小さな巣をさして歸つて行く。

その影を追つて、又泣くやうに夜の組の就業を知らせる汽笛が鳴る。

日向ぼつこ

東から一人西から一人と集つて、今日も銅像のめぐりには四五人の人が休んでゐる。いづれも南側の日當りのよい大砲に腰をかけて、弱い冬の光線をなるべく多く浴びやうとしてゐる。

すぐ前の柵外を忙しさうに電車が馳つてゐる。併し彼等は皆呑氣さうな顔をして、どこといふあてもなくぼんやり眺めてゐる。

どの顔を見ても、滿更田舍から出たばかりではないらしい。が、それかと云つて如何なる階級に屬すべき人々か解らない。其中に只一人、木綿のよれ〳〵になつた袴を着けた書生がゐる。——年はもう三十の上だ

らう。黄色い、どこをたゝいても活氣などの出さうもない顔をして、氣の抜けたやうに大砲に寄りかゝつてゐる。流行後れの茶色の帽子には、いつ拂つたとも見えない塵埃が溜つてゐる。それでもインキ瓶を袴の紐につるして、寒さうに兩手を懷の中へしまひ込んでゐる。これもどういふ種類の學校へ通つてゐるのか一寸判斷がつかない。

初めこの男が銅像の側へ近づいて來た時、一同はびつくりした樣に其顔を見守つた。

「こゝはお前などの來る所ではないよ」

といふやうに彼等の眼が光つた。しかし老書生は少しもそんな事には氣が付かなかつた。そして同じ日向ぼつこの群に入つた時には、もう誰

も彼に注意する者はなかつた。老書生は忽ち彼等の仲間になつた。

行き所のない心が幾つも幾つもさまよつてゐた。

誰の心にも希望といふものが無かつた。誰の心にも「將來」といふ事を考へてはゐなかつた。それでも人が其前と通ると、皆同じやうにじろ〳〵とそれを見た。

併し彼等は特別の感興を以て見るわけではない。若い男の眼が、美しい少女の顔に惹きつけられたり、紅顔の少年達が、金モールの軍服姿をいつまでも〳〵眺めたりするやうな、そんな深い執着心があるのではない。憧がれるのでもなく、羨しがるのでもない。ただぼんやり明いた瞳の中へ、自分等と違つた階級の人間が映るといふに過ぎない。だからそれが美くしいリボンの影でも、穢ない乞食の姿でも、彼等に與へる感銘にはさして變りがないのだ。

日がだん〳〵廻るに從つて、彼等は次第に其影を趁うて移つた。そして夏の夜若い男女が密合の出會ひ場とする所を、彼等はいつまでも〳〵離れやうとはしなかつた。

睡眠

郡部の牧場を出る時はまだ暗かつた。それでも若い男は、勢ひよく牛乳の車をひいて驅け出した。

馴れた道なので、暗くても物に突き當るやうな事は無かつた。寒い風が鼻の尖や耳の縁を痛くした。毛糸のシャッツを二枚も重ねてゐるが、折々膚までヒヤ〳〵と泌みるやうに思はれる事もあつた。

星明りの空には、まだ葉の出ない欅の梢が眞黑に突き出してゐた。其下を彼は車をひいて威勢よく驅けぬけた。

だん〴〵廣い道へ出た。

恐ろしく大きな建物が、まるで死んだやうになつて眠つてゐた。其姿が急に若者に押し被さるやうに思はれた。

若者はびつくりして立留つた。

そしてよく眼を開いて見ると、建物には別に何の變つた事もなかつた。

「眠いせいか知らん？」

若者はかう思つて、又がら〴〵と車をひき出した。併し足がだん〴〵深い海の中へ入つて行くやうな氣がして來た。道が非常に凸凹になつたやうに思はれて、折々「はつ」と溜息をつかせられる事もあつた。けれどもよく見れば、道は別に凸凹してゐるわけではなかつた。

「どうしたんだらう？」

若者は口惜しさうに呟いて、強て威勢をつけて驅け出した。

やがて道が左に折れた。すぐ右に曲つた。そこから狹いながらも街になつた。商店はまだすつかり眠つてゐる。折々消え殘つた軒燈が、いろ〳〵な看板をぼんやり照してゐる。それでもう街には朝らしい風が忍び〳〵にさまよつてゐた。

若者の足はだん〴〵重くなつて來た。眼の無い海月のやうなものがゐて、それが地の中から一生懸命靴足袋の裏へ吸ひ付くやうに思はれた。若者は引き拔き〳〵するやうに歩いた。けれども次第に吸ひつくのが強くなつて、しまひには脛にまでからまつて來るやうに感じられた。そればかりでは無い。厚い軟らかい霧のやうなものが現はれて、じわ〴〵と身體を包んで了ふやうに思はれた。

ふと若者は眼を見開いた。そして又びつくりして驅け出した。兩側の家にガラ〴〵と車の音が反響した。

暫く驅けてゐたかと思ふと、また其足がたど〳〵しくなつて來た。若者の眼にはあたりがだん〴〵沈んで行くやうに思はれた。軒燈の灯がぼうと大きく花のやうな輪をかいた。

やがてだら〴〵坂にさしかゝると、もう若者は慾にも得にも動けなくなつた。そして車を道の眞中に止めて、思はずよろ〳〵とそれに寄りかゝつた。

若者の口からは間もなく小さな鼾がもれた。

灯の街へ

夕方、私は何の當もなく家を出た。

街路(とほり)にはもう軒並に軒燈がついてゐた。綺麗に品物を飾り立てた洋物店や、其隣りの大きな西洋菓子屋などには、氣持よく青色の瓦斯が輝いてゐた。

何事が起つたのか、多くの人が同じ方へ向いてぞろ〳〵と歩いて行く。男も、女も、殊に若い人達が多かつた。——中には髯のある立派な軍人らしいのが——美くしい妻を連れて傲然と行くのもあつた。夫婦とは見えない樣な若い男と女もあつた。さういふ人達の樣子は何となく人目を憚るやうで、それでゐてどことなく浮々した所があつた。

ぞろ〳〵と行く足拍子につれて、私もいつとなしに同じ方へ向いて歩き出した。

何となく樂しい樣な氣持がして來た。胸の底が擽ぐられるやうに悸り出した。何處か非常に面白い所へ——そこには電燈が花のやうについて、あたりが晝のやうに明るくて、音樂だの、舞踏だの、綺麗な女だの、琥珀色の酒だのがあつて、空氣の中へ歡樂の聲が滿ち〳〵てゐるやうな——そんな所へ行くやうな氣がして、心は次第に先へと急ぎ出した。

「やァ——」

と、突然私に聲をかけた者があつた。驚いて見ると、私の知つてるS

が矢張群集の中に交つてゐるのであつた。

「ヤァー」

私も同じやうな返事をした。そして二人は顔を見合せて笑つた。Sはすぐ私の側へ近づいて來た。併し何も話しかけやうとはしないで、相變らず群集と同じ方向へ歩いて行く。

皆なの足音が騷がしく夕暮の街に響いた。

Sは愉快でたまらぬと云つたやうに、小聲で詩か何かうなり出した。するとあちらでもこちらでもそれに和する聲が起つた。

私達はだん〳〵廣い街へ出た。

そこにはぞろ〳〵と歩いてゐる人の數がます〳〵多くなつた。若い女

の瞳は誰にでも話しかけたいといふやうに輝いた。そして人々の樣子が次第に浮々して來た。何とも言へないどよめきの聲が、ひそかに天の一方へ逃げて行くやうに思はれた。やがて遠くの方に押し合ふ人の影をもれて、無數のカンテラの灯がチラ〳〵と見えて來た。其邊の空はぼうとして、丁度火事の焰が雲に映つてゐるやうに明るく見えた。

その灯を望んで、私達はなほもぞろ〳〵歩いて行つた。

幼い芽

あらゆる物の運動が一時に停まつたやうに思はれた。私はじつと耳を澄まして更けゆく夜の底から何ものかの音をきゝとらうと思つた。

地球は今その活動をやめたのであらうか、深くこの世を被ふてゐる闇の底からは、輕い羽毛の風に乘つてたゞよふほどの氣はひも聽こえなかつた。眼を閉ぢると、自分の坐つてゐる家が、限りなく下へ下へと落ちて行くやうに思はれた。

私は病兒の痩せた手をそつと握つて見た。それは鑛物にでも觸れるやうに冷たかつた。枕許の時計をとつて脈搏を數へて見ると、忙がしくセコンドの音を追ひこして、一分間に百五十の上を搏つのであつた。それでも耳をずつと鼻腔の處へ持つてゆくと、微かに呼吸をつゞけてゐるのがきゝとれた。

『どんな事があつたつて、稚い芽は伸びる權利があるんだ。』

私は強て幾度もこんなことを考へた。けれどもそのすぐあとから、引いて行く潮のやうな力が、この弱い病兒の生命を奪はうとしてゐるかのやうに思はれてならなかつた。力の盡きた獨樂が次第にその首を振つて止まらうとしてゐるやうに、病兒も一刻一刻に吸ふ息が弱つて行くのではあるまいか……

電燈は青い蚊帳の外に老人のやうな光を放つてゐた。その光もだん

〻淡くなつて行くやうに思はれた。もしか消えはしないだらうか、ぱつかり消えた時は！　かう思つて私の身體は戰慄を覺えた。

いろんな不祥な考へが頭の中に渦のやうに湧きかへつた。朝來た物を言はない眞白な乞食婆……闇の中を默つて彼方へ歩いてゆく病兒の薄い影……一番近い關係の者にのみ見えるといふ青い人魂……

逃げてゆくものを遮りとゞめようとして、私は思はす空に手をひろげようとした。

直接に顏に當る光をさけるために、電燈の球には薄い紗の被ひが懸けてあつた。その被ひを透して蚊帳の中に忍びこんでくる微かな光にすかして見ると、病兒は白眼を半ばあらはして眠つてゐるのであつた。その晩までは一寸指の尖にさはつても眼をさましたのだが、もうこの夜は體温計を腋の下に挿してやつても昏々として眠つてゐた。

病兒の向うには、疲れた人が小さくなつて横つてゐた。その樣子は眠れない眼を、無理に膠か糊でゞも閉ぢつけられたやうであつた。眼の下と頰の肉がすつかりこけて、投げ出した手足は日に乾した大根を見るやうであつた。

私の頭は眠つてゐるこの二つのものに曳きずられるやうであつた。じつと眼をあいてゐるつもりでも、いつの間にか二つの眼瞼は眞中で出あうてゐるのであつた。强て瞳を見はつてゐても、そこに何物の象も映

らない事があつた。

私には總てのものがこの世から消えて行つたやうに思はれた。眼の前に擴がつてゐるものは、たゞ單調なうつろな空間ばかりで、眼に見えない黑い喪が、その邊にふはり〳〵と漂うてゐるやうであつた。

『僕だけは起きてゐなくては……』

私は幾度かかう思つて心を勵ました。併し幾晩もつゞけた徹夜のために、すつかり頭が萎えて了つて、腦の內側はもう紅くたゞれてでもゐるのか、反射能力さへ持つてゐなかつた。

ふと氣がつくと、病室が全體小蒸汽のやうに搖れてゐるやうであつた。私は電燈の傘に眼をやつた。併し電燈は少しも動いてはゐなかつた。そこで今度は蚊帳の外の障子の方を見ると、その骨が悉くゆがんで、今にも倒れかゝりさうに思はれた。

私は勝手へ出て行つて顏を洗つた。そして序に氷囊をかへようと思つて氷を碎いた。

カン、カンといふ音が、自分ながら喫驚するほど高く鼓膜に衝き當つた。小さな氷の碎ける音は、この家ばかりでなく、すべての空間を最も高く支配する響のやうに思はれた。

私は碎いた氷で二つの氷囊を一ぱいに滿たした。そして燃えるやうに熱の高い額と、太鼓の皮のやうに狂氣(きちがひ)めいて躍つてゐる心臟の上にあてゝやつた。

單調な時は、靜かに、極めてゆつくりと其の足を運んで行くやうであつた。その靜かな時の流れて行くのが私には堪へられなかつた。じつと無言のまゝ眼を見張つてゐると、頭の中はだん〳〵熱を持つて暑くなつてくるやうであつた。そして時々その暑い鎔爐のなかへ、脊髓の方から氷のやうな寒い風が襲うてくるのであつた。

私は何年かの前、或る海岸で迎へた明方を思ひ出した。その時も私は矢張重い病人の枕許についてゐたのであつた。その病人は迫つて來た死の爲に毎晩眠る事が出來なかつた。

『あゝ、早く夜があけるといゝなァ。』

夜が更けて、重くるしい沈默が地上に滿ちわたる時、いつも病人はかう云つて、單調な『時』の早く過ぎて行くのを祈るのであつた。それで日の光が少しでも闇の中に見え出すと、病人は嬉しさうに雨戸をあけさせて、じつと外の方を眺めやるのであつた。

その頃は毎日陰氣な雨が降りつゞいた。窓から病室に流れ込む空氣も肌にひいやりと濕つぽかつた。その時の病人は、とう〳〵夏の明方の三時頃に呼吸を引きとつて了つた。

それから後、あけ方は私のおそろしいものゝ一つになつた。夜の終りがこの世を引き拂ふ時、その黑い喪に人間の魂を盜んで行くやうにさへ思はれた。

併し單調な夜は容易にこの世から引き去らうとしなかつた。大きな空間の四方を、強いニスでゞも塗りかためたやうに、この家をめぐる空氣の微動する氣はひさへもきこえなかつた。

病兒はいつまでも昏々と眠つてゐた。或る大きな力の前にある小羊のやうに、生存の權利を主張する事もなく、又死の近づいてゐるといふ事をも知らなかつた。そして小さな木乃伊のやうに力なく横はつてゐるのであつた。

『稚い芽は伸びる權利があるんだ！』

私はかういふ考へを何處までも繰りかへした。それと共に一層不安の念は昂まるのであつた。

不意に私の疲れた頭は、高い物音で呼びさまされた。それはこの靜かな大きな谷の底をゆるがすやうに、窓の外にある水道の水のほとばしる音であつた。もう誰か水を汲みに來たのである。さはやかな水のバケツの底にはねかへる音は、一晩眠らなかつた頭に痛いやうに響いて來た。

私は蚊帳の外に出て、高窓の戸をほそ目にあけて見た。成程夜は今漸く明け放れるところであつた。隣りの屋根や、少し離れた松の樹立などには、まだ湯氣のやうな靄がひつたりと吸ひついてゐた。

私は再び蚊帳の中へ身體を入れた。そして病兒の口許へ耳をそつと持つて行つた。

廣い國へ

一

青い大きな玻璃の壺がある――おみつは其の壺の底を歩いてゐるやうに思つた。

眼の前には高い馬籠峠が、胸の上におしかゝつてくるやうに聳えてゐた。その中腹より上の方には、まだ雪が白く消え殘つて見えた。晝少し過ぎた太陽は其上にキラ〳〵と輝いてゐた。その銀色に光る雪の色を見ると、おみつの泣き脹らした眼は又新らしく痛み出すやうに思はれた。

『あの峠さへ越えてしまへば……』

おみつはさう思つて、初めて越える其の峠のさきの光の國を胸に描いた。そしてひとり旅の寂しさも思はずに、張りつめた氣を一層勵まして道を急ぐのであつた。

山の多い國の空はまだ冬のやうに青々と澄んでゐた。その深い青さは綠玉石を研ぎすまして張りのべたやうであつた。もし其の上に黃金の指環でもころばしたならば、美くしい鈴のやうな音は、この澄みきつた壺の底に滿ち渡るであらうとさへ思はれた。午後の軟かい日の光は、濁りのない空氣を透して、大空の隅から隅まで流れ渡つてゐた。

併しおみつの心には、之等の美しくしい山の形も、仰いでひざまづきたいやうな空の色も、それをしみ〳〵と享け容れてゐる暇は無かつた。

心はたゞさきの方にばかり急がれて、しつかり足首に結び付けた草履の紐が、ともすると弛んでくるのが氣にかゝつた。

三里……四里……家からはもう五里も離れたらうか。初めて親を棄て、家をすてゝ故郷を逃げ出した時とは違つて、後ろから追手のかゝるといふ心配はないが、それだけ足の草臥れがひどいやうに思はれた。腋の下に手を入れて見ると、冷い汗がしつとりと肌繻絆ににじんでゐた。白いふくら脛のあたりには、手を觸れて見ると、堅い瘤のやうな物があらはれてゐた。

それでもおみつは大して苦しいとは思はなかつた。この峠さへ越してしまへば、それからさきは何里あつても下り坂である……そのさきには三留野がある……。

『三留野！』

かう思つたばかりでもおみつの胸は動悸が高くなるやうであつた。—そこの停車場から汽車に乘つて了へば、あとは遠いと云つてもやがて名古屋まで行くことが出來る。名古屋で乘りかへれば二時間も經たない中に豐橋へつく。

『あなた……あなた歸つてまゐりましたよ。』

かう云つたならどんなにあの人が驚くだらう。——さう思つてくると、豐橋の男の家の樣子がまざ〳〵と眼の前に浮んでくるのであつた。

おみつが男と共に住んでゐた豐橋の家はごく小さな建前であつた。部

屋は八疊と四疊半の二室きりで、疊や建具も古ぼけて煤ばんでゐた。けれどもおみつは其の古い小さな家を、自分の故郷の廣い青疊よりも懷かしい隱れ家であると思つた。二坪ばかりの裏の庭には鳳仙花などが咲いてゐた。男と一緒に緣日へ行つて買つて來た虫の籠は、自分の手で緣側の敷居に釘を打つてそれに懸けた。

『今のうちがお悞しみでございますよ。』

近所の年寄などの何氣ない挨拶にも、おみつは顏を眞赧にして返辭にこまる程であつた。

男はその町の煙草工場の道具方といふやうな仕事を勤めてゐた。それで朝早く家を出て、夕方は割合に早く戻るのであつた。けれども初めて親の家を離れて、知らない人ばかりの他鄕をさまようおみつには、男の歸宅が待ち遠で堪えられないのであつた。

しかし男はこれ迄も大方旅にばかりゐたので——或る田舍芝居の道具方などをして、あちこちと彷徨うてばかりゐたので、——知らぬ他鄕にあるといふ事を少しも氣にかけなかつた。

『旅にある者がそんな弱い事でどうなるんだ。また何だらう、故鄕のお父さんが戀しくなつたんだろ。』

男はかう云つて、折々職人らしく叱りつけるのであつた。自分で棄てた親の事を思ふといふのではないが、おみつは折々夕方など泣きたいやうな心持になる事が多かつた。

豐橋の半歲は夢の樣に過ぎて行つた。山の中の雪にばかり親んでゐたおみつの眼には、黑いばかりに綠の濃い三河灣の水も珍らしかつた。だん〳〵冬が近づいて來た或る朝、ふと暖かさうな某――の家の牆根の外に紅く色づいた密柑のあるのを見つけた事なども忘れられなかつた。

幾つかの樂しい思ひ出、考へる毎に胸の鳴るやうな悲しい記憶、それ等の影は、摑む事の出來ない雲のやうに、おみつの眼の前をかすめて行つた。おみつはその一つでもよいから、しつかり心に捕へたいと思つた。けれどもおみつの眼は、たゞ空しく驚き盤の早變りを見つめてゐるに過ぎなかつた。

二

おみつが密柑の熟る國から雪の多い山國の故鄕へ連れ戻されたのは、その明くる年の三月の初めであつた。

もうその頃は東京には櫻の花の噂などの初まる頃であつた。併し寒い山國にはこれから改めて冬がくるやうにさへ思はれた。野や里にはもう雪は大方消へてゐるが、畑の麥はまだ靑い芽を縮めて身顫ひをしてゐるのであつた。折々鐵の針のやうな霜が、瀨戸の牆根などに置く事があつた。さういふ朝は、この平原をめぐつて高く聳えてゐる山々は、一層その頂を白く染めて、日に輝いてゐるのであつた。

故鄕に返つてからは、おみつの胸は鐵の扉か何かで押し縮められるやうであつた。豐橋にゐる中に芽ぐみかけた柔い芽が、この冷い國の風に

あつて、再び堅くその蕾を閉ぢて了うやうであつた。

「みつ一寸おいで。」

かう云つて叔母は呼ぶのであつた。叔母は預つたものを大切に取扱はなくてはならぬといふやうに、笑顔一つしないでおみつを別室へ連れて行くのであつた。

『おまへはほんとにまァえらい事をしておくれだねえ……。』

叔母はかう云つて、暫くじつとおみつの顔を見つめるのであつた。けれどもおみつは何とも答へる言葉を知らないので、たゞ默つてじつといつまでも俯向いてゐた。

『私の家であんな事になつたのだから、私はほんとうにお前のお父さんに申わけがない……。』

叔母は長い煙管に煙草をつめて喫みながら、如何にも他聞を憚るやうに低い聲でいふのであつた。

『あァして婚禮の日どりまできまつてゐたし、それに結納の取りかはせの濟んでる事はお前も知つてる筈ぢやないかね。他所と異つて、お前のお父さんはこの町で立派な口きゝだ。その顔にお前は泥を塗つて了ひなすつた。まァ結納をお返しするのにどれほどこちらが耻をかいたとお思ひだへ……それだのに人もあらうにあんな道樂者……』

叔母はこゝまで云ひかけたが、ふと口をつぐんで烟管を口にあてた。そして一すい吸つて又改めて語り出すのであつた。

『どうだへ、その男は末の見込みがありさうかへ？』

おみつはそれでも默つて俯向いてゐた。

『お前ほんとうの事を云つてごらん。』

叔母は睨むやうな顔をしておみつを見つめてゐた。その顔にはおみつの胸のうちを讀んだやうな色が浮んでゐた。

『まことに申譯ございません。』

おみつの答へはたゞこれだけであつた。

それから毎日叔父や叔母が、入れ代り立ちかはつておみつを說いた。田舍の町にゐて一代に數萬の資產をこしらへたといふ叔父などは、賤しい言葉の限りをつくしておみつの男を惡口した。

『全體お前の父親が氣に入らない。こんな道樂娘を生むと云ふのが初めから間違つてゐる。』

遂にはこんな事まで云ふのであつた。

おみつはいつでも默つてじつとこらへてゐた。併しから默つてきいてゐるだけでも若い娘には容易の事では無かつた。今にもその胸が張り裂けさうに思はれるのを、おみつは大切な寶石箱でも守るやうにじつとおさへてゐた。その眼からは涙も白く乾いて了ふやうに思はれた。

寂しい田舍の町の三月は、山の雪の白さに寒い一日が明けて、又山の雪の白さに一日が暮れて行つた。かうして一日一日と靜かな日が過ぎて行つた。それでも日增しに春が芽ぐむらしく、薄い紙を一枚一枚剝がす

やうに、何處からともなく新らしい力が伸びてくるやうであつた。

おみつは折々裏の庭へ出て空を眺めた。空にも何となく軟らかいものが漂つてゐるやうに思はれた。夕方など、白い山の頂が薄く卵色に染められる事があつた。そのほのかな明るさを見つめてゐると、おみつの胸は何ものにか押し破られるやうに動悸を打つのであつた。

それから二三日過ぎて、おみつは初めて町の湯に行つた。その湯屋の鏡の前に立つても、おみつは自分の顔を見る勇氣を持つてゐなかつた。おみつは湯氣の中にかくれるやうにして、片隅に小さくなつて身體を洗つてゐた。

『あれが……まァさう……芝居ものと……。』

ふとこんな言葉がおみつの耳に入つた。おみつは急に身體の熱くなるのを覺えた。そしてこそ〳〵に湯から上つた。百千の眼が絶えずおみつの身體を射すくめてゐるやうに思はれた。

おみつは顔を眞赧(まつか)にして、せい〳〵息をきらしながら叔母の家に歸つて來た。そして自分の部屋に逃げ込むやうにして、がつかりそこの座蒲團の上に倒れて了つた。

『私どうしてもこゝにはゐられない。』

暫くしてから、おみつはかう思ひ入つたやうに獨り言(ひとごと)を云つた。

三

おみつが動かす事の出來ない決心を堅めて父の前へ出た時には、父親

は呆れたやうに腕組みをして暫く苦りきつてゐた。併し叔父や叔母を介しての幾度かの説諭も何の甲斐が無いといふ事を知つた時には、父親も案外に小言を云はなかつた。

『それぢや勝手にするがいゝ。旅費だけは俺が出してやる。その變りこれからはもう親や故郷があると思つてはならないぞ！』

父親は何か大切なものでも捨てるやうな聲でかう云つた。おみつはたゞ默つて父の前に首をさげた。

おみつが半ば追はれるやうに家を出るといふ朝は、美くしい朝日が雪に滿ちた東の山から上つてゐた。その朝は霜が眞白に裏の牆根に置いて、氷つた藁くずなどの硬く庭の面に凍てついてゐるのも悲しく思はれた。おみつは汲み置きの洗面器の面に薄く張つた氷を破つて、それでうがひを使ひながら、心の中に其の日の道に滯りのない事を祈つた。

幼い弟や妹は驚いたやうな眼を見張るばかりで、おみつの側へ近よらうとする者さへなかつた。けれども中學へ行つてゐる弟は蔑むやうにおみつの顏を見つめてゐた。

母と祖母はもう眼に一杯涙をためて、遠く別れて行く人に碌々口をきく事さへも出來なかつた。おみつが緣側に出て、俯向きながら草履の紐を結んでゐるのを見て、母はたまらなさうにはら〳〵と涙をこぼした。

『私はそこらまで送つてあげやう。』

かう云つて母はあはてゝ臺所の方へ廻るのであつた。

『私もすこし送りませうよ。』

祖母も其の後からつゞいておもてへ出た。

長い間つゞいた××家――この町で名のきこへた古い製絲家、その家の娘がかうして自ら家を捨てゝ行くといふ事は、安らかな日に馴れた母や祖母には一大事であつた。そして又この家を捨てゝ行く娘がいじらしく思はれた。

おみつも流石に名殘が惜しまれて、何か話をしたいと思ふのだが、すぐ泣けさうになるので、口を開く事が出來なかつた。母も祖母も默つておみつのあとに從つた。

三人は町にある中は、裏通りのなるべく寂しい處を選んで歩いた。日はだん〳〵高くつ登て來て、山國の空は益々青さを加へるやうであつた。おみつにはその細い道の霜どけのしめりも懷かしかつた。道端に手を延べてゐる桑の樹の白い肌や、藁葺の家の屋根に立つて枯れてゐる草もしみ〳〵と胸に泌みた。子供のうちから見なれたなつかしい家々、道の角の大石、そんなものまで心の中に覺えて置かうとして見廻すのであつた。母と祖母とに送られるにつけても、心が何となく甘へるやうで、ともするとすゝり泣きの聲をもらしさうにするのであつた。

暫くしてから道は縣道に入つた。そのあたりにはもう歩いてゐる人も少なく、白く乾いてゐる道は單調な畑の間を遠くつゞいてゐるのであつた。これから道が少しく下りにならうとする處まで行つて、そこでおみ

つは立ち留まつた。

『お母さん、何處まで來て下すつても際限がございませんから……。』

かう云つておみつは强て笑顔を見せるのであつた。

『さうかい……。』

母は是非なさゝうにかう云つたが、そこにゐる祖母の方を顧みて、

『それではお婆さんもゐるのだから、こゝでお別れとしようかね。』

『はい、まことに有難ふございました。』

とまでは云つたが、こらへてゐたおみつの眼からは、はら〳〵と新らしい涙がこぼれるのであつた。母も祖母も眼を眞赤(まつか)にして、それを娘に見せまいとして頻に咳にまぎらすのであつた。

靜かな日は三人を光の底に埋めやうとするやうであつた。青い空は聲もなくひろ〳〵と擴がつたまゝで、山から山の頂きへ圓天井のやうにかぶさつてゐた。こゝに三人の女が泣いてゐるといふ事は、その山や空には何のかゝはりもないやうに思はれた。

暫くして、母はようやく涙をふいて、

『それではね、どうぞ身體を大切にしておくれよ。熊の膽(ゐ)と烏犀角はその風呂敷の中に入れて置いたからね、あちらは暖かいだらうが、風などひかないやうにしておくれ。』

『はい……お母さんもどうぞ時候の變り目などにはお氣をつけなすつて下さいな——そしてお婆さんも……。』

云ひさしておみつは更に新らしい涙を流すのであつた。祖母もおろ〳〵聲を出して、

『知らない土地では何かと不自由な事が多いだろねえ、他人に氣を付けて、まァ辛棒するやうにしなさいよ。』

『有難うございます。』

おみつはもう此の上物をいふ事は出來なかつた。そこで二人に別れて、早く見えない處まで行かうと道を急いだ。母と祖母はその後ろ姿をいつまでも見送つてゐた。

四

上りだけで二里に餘る山道は女の足には隨分辛かつた。おみつは峠の麓で拾つた杖を力にして、折々道側に立留つて息を休めた。そして又新らしい勇氣を出して歩み出すのであつた。それでもおみつの町から中央西線の停車場へ越えるにはこの道一筋しかないので、後ろの方から屈强な男などがおみつを追ひこして行く事もあつた。

『姐さん一人旅だね、どうだへ峠の向ふまで送つてやらうか。』

こんな事を云つておみつの側へ寄つてくる男があつた。さういふ時は、おみつは轟く胸をおし鎭めながら、

『いゝえ連れがあるのでございますよ。あとの方に見えなかつたでせうか。』

などと何氣ない顏をして答へるのであつた。そして男が行き過ぎて了

ふと、その後からそろ〳〵と坂を上るのであつた。

前の方を見あげると、行く先に幾つもうね〳〵とした道が見えるのであつた。

『あれはどこへ行く道だらう？』

から思つて近づいて見ると、それはみんな一本の道が九十九折につゞいてゐるのであつた。

日がめぐるに從つて、空の何處かに淺い紫の色が溶け込んで來たやうに思はれた。麓の方を見かへると、山に圍まれた谿のやうな平地には、薄い絹のやうな靄が立ち迷ふて、そしてあちらこちらに小さな家が眠つてゐるやうであつた。遠く西の方には、低い幾つかの山の上に、日本アルプスの眞白な峰が劒のやうにつゞいて見えた。その頂きは一體に日に照らされて、青い空にはのかな紫色を反射してゐるのであつた。

おみつは之等の山々を見つめて、これから自分の越えて行く道のりを考へた。その時おみつの胸の中にはもう家の事は少しも無かつた。

『早くこの峠を越えて了ひたい。』

おみつの胸はたゞ之だけで滿たされてゐた。背中にはしつとりと汗がにじんで、草履の紐が次第に足首に痛く當るのであつた。

大きな青い玻璃の壺――その壺の底からおみつはだん〳〵峠の頂きへ上りつめて來た。おみつが峠の頂きへ立つた時は、丁度それは水晶で張りつめた大きな殿堂へ入つたやうであつた。時はもう晝を餘程過ぎてゐ

たが、見渡す限り山にも、谿にも、空にも日の光が一面に流れてゐた。

おみつは光の多い國に入つたので、暫らくじつと眼をつぶつてゐたいやうに思つた。何とも云へない涙が眼瞼の後ろからにじみ出すやうにさへ思はれた。

峠の南にはもう雪は少しも見えなかつた。道側の樹の芽も何となく紅くふくらんだやうで、枯草の間にはポツチリと青いものさへ芽ぐんで見えた。小さな鳥——町にゐる中は見た事もないやうな小鳥が、チ、チ、と鳴きながら、枯草の中から何處かへ飛んで行く事もあつた。

『豐橋ではどんなにか喫驚するだらう。』

かう思つたおみつの顔には美しい微笑が浮んだ。——ひとりでどんな事をしてゐたらう、お勝手などゞんなにか汚くなつたに相違ない、留守にして丁度一ヶ月になるのだから、きつとゞんなにか不自由で困つたらう……おみつはこんな事を考へてゐたが、ふとこの朝母や祖母と別れた事を思ひ出した。おみつの眼は急に曇つて來た。じつとこらへても、あとから〳〵と眼瞼の中から涙がこみあげてくるのであつた。

『あァもう何も思ふまい。』

おみつはかう心に決めて、それから下り坂の道にかゝつた。

南の方には暖い日の光が漂ふてゐるやうであつた。遙に見渡すと綠の黑い森などが見えて、青い空の稍々褐色を溶きませた中に、白い煙を吹いてゐる煙突などもあつた。

『あれが三留野に相違ない。』

かう思つておみつは足の輕くなるのを覺えた。故郷を遠く離れて、新らしい廣い國へ行くといふ考へは、おみつの小さな胸の中に一ぱいになつた。

ある男の死

明るい夏の光が急に街の屋根の上に滿ち渡つた。それは長い雨が毎日々々窓のガラスを曇らせて降りつゞいた後であつた。

久しく都會の空を覆ふてゐた厚い煤色の雲の層は、いつの間にかその縁を銀色にキラキラと輝かせてゐた。そして或るものは暑さうに高い大きな煙突のまわりなどをさまよひ、また或るものは惱ましさうに白い袖を振つて煉瓦造りの尖塔の上などを流れてゐた。

M——工場の植字工Y——は、その頃から、自分の身體のだん〳〵衰へてゆくことを知つた。それも手や足のどこが弱つたといふことは出來

ないが、全身に氣力が無くなつて、じつと立つてゐるのも苦しいやうに思はれることが多くなつた。

いつも頭に重い鉢か何かを載せてゐるやうであつた。仕事に追はれて忙がしく働いてゐる時でも、折々ぼんやりと見開いてゐる眼のまへに、黒い幕の垂れてくるやうに思はれることがあつた。樹の葉の青い色や、夏の花のめざましい色などを見ると、彼は胸を壓しつけられるやうに堪えがたい苦しさを覺えるのであつた。すべての物に滿ち渡る力――夏の光に會つて生々と伸びてゆくあらゆる物の力が、だん〳〵弱つてゆくY――の身體に一層強く迫るやうに思はれた。

それでもY――は一生懸命に自分の仕事に精を出して働いた。その樣子は、一日々々とケース臺を睨みつめるやうなふうに變つて行つた。

窓のそとには眩しいやうな日の光が、白い海の水のやうに漲りあふれて滿ちてゐた。長い雨に濡れて、この地球の面は海綿のやうに十分に水分を含んでゐた。その水分を休みなしに吐き出すために、すべての物は快く夏の日光を親しんでゐるやうであつた。家の蔭の濕つた地や、北側になつてゐる屋根の黒い瓦などは、絶えず淡い煙のやうな水蒸氣をほそ〳〵と大氣のなかに吐き出してゐた。

この世の中のあらゆるものは、あたゝかい日の光に照らされて、一刻も休まずにずんずんと伸びてゆくやうに思はれた。M――工場の庭にあ

る公孫樹の葉などは、一時生活をやめてゐたのが、改めて新らしい黄いろい芽を吹き出したかのやうに見えた。廣い青桐の葉の濃い緑の上に、明るい日の光は生々とはねかへて踊つてゐた。

地の中に住む微さなものも、地の上に生きてゐるあらゆる生物も、すべて力の限りその生命を働かせてゐるやうであつた。じつと眼をつぶつてみると、この世界にはあらゆる物の細胞の分裂する力と、そのゆるやかな呼吸とが満ちてゐるやうであつた。

Y――の心持はいつの間にか水に溺れようとする者のやうにつきつめてゐた。廣い大きな海の中で一本の木片を見つけ出したやうに、彼は一日仕事場のケース臺にじつとしがみついてゐた。

彼の隣りには、彼と同じ仕事の仲間が、頻りに活字を組んでゐた。彼の前にもまた同じ仲間の者が同じ仕事をつゞけてゐた。しかしY――にはそれ等の顔が、だん〳〵彼の知らない者に變つて行くやうに思はれた。

彼等は始終何事か面白さうに話しあつて、折々高い聲で笑ふのであつた。しかし其の喋る言葉がY――には何の事だか解らないやうに思はれた。長い間――三年も、五年も、同じ場所に同じケース臺を並べて、同じやうに喋つたり笑つたりして來たのが、Y――にはさういふ事があつたやうには思はれなくなつた。

『Y――さんこの頃憤つてるんぢやないか。』

仲間の者は折々こんなことを私語きあふやうになつた。しかしY――はそれをきいてもたゞニヤリと笑ふばかりで、以前のやうに元氣よく物をいふことは無くなつた。

小組を受け持つてゐる職工のケース臺には、たいてい誰の處にも美くしい女の寫眞版の切り拔きなどが張つてあつた。なかには名高い俳優の似顔繪などを大事さうに切りとつて置く者もあつた。鉛の塵埃とインキの匂ひとにいつも暗くなつてゐる部屋には、かういふ寫眞版などが僅かに明るい空氣のやうなものであつた。Y――の活字臺にそんなものが一二枚張りつけてあつた。けれども彼は、古い昔にそんな物は忘れて了つたやうに、いつもおし默つて、スチックとケース台との間に手を動かしてゐるのであつた。

『俺の仕事は追はれてるのぢやないか…。』

Y――は近頃かういふ事をひどく氣に懸けるやうになつた。けれどもあせればあせる程呼吸が迫つてきて、どうしても手が思ふやうに動かないのであつた。

窓の外に輝いてゐる日の光は、折々彼に耐(こら)える事の出來ない眩暈を催させた。さういふ時は彼は眼の前の木の枠によりかゝつて、暫らく鉛くさいルビの中に蒼い顔をうづめるのであつた。

日向(ひなた)くさい咽(む)せるやうな空氣や、亞鉛屋根のカラ〳〵に乾いてゆくやうな臭ひなどが、絶えず窓から工場の中に忍び込んで來た。その匂ひを

かぐ度に、Y――はいつもむか〳〵と嘔吐を覺えるのであつた。

『寒い！』

突然かう云つてY――は身震ひをする事があつた。その時は彼の顏は眞蒼に變つて、物に驚いたやうに血の氣のない唇をふるはしてゐるのであつた。

仲間の者はだん〳〵彼の樣子のおかしい事に氣がついた。

『Y――さん、醫者にかゝつてるのか？』

などゝ親切にきく者もあつた。

『うむ……いや……。』

Y――の答へはいつもきまつてこれだけであつた。それ以上は誰が訊ねても、氣味の惡い笑ひを見せるばかりで答へなかつた。

Y――の家は――その下宿は、M――工場から餘り遠く隔つてゐなかつた。それは或る繁華な通りの裏の裏に當る、小さな倉造りの家の二階であつた。彼はそこの暗い部屋に長い間ひとりでゐた。蟹が小さな孔の中に潜んでゐるやうに、彼はその小さな窓の奥に隱れるやうにして生きてゐた。

併しY――は近頃その孔の中にひとりの友達を連れて來た。それは彼が長い間ひかす事が出來ないで苦しんでゐた遊女であつた。その女の年期が漸くこの頃になつてあけたのであつた。

けれど二人が一緒になつた時には、Y――の健康はもう著しく衰へてゐた。でもY――はいつもと餘り變らない樣子をして、毎朝、朝早くからM――工場へ出かけて行くのであつた。

或る日の夕方、Y――は工場から、恐ろしい程蒼白い顏をして歸つて來た。その樣子は或る透明なものゝ影が、夕暮の迫る暗い街を音もなく吹いて通るやうであつた。

『まァ……。』

男が部屋の入口に立つた時に、女は喫驚したやうにかう云つて、暫くじろ〳〵とその顏を見つめてゐた。

『どうしたんだ？』

彼は不思議さうに女の顏を見かへすのであつた。

『あなた氣分でも惡るいんぢやないんですか、私何だかこの部屋に水か何か入つて來たやうな氣持がした。』

『いゝや、何ともないよ。』

彼はいつもに似ず元氣な聲でかう云つて、何となく樂しさうにそこへ座るのであつた。

その夜は外の空氣に香ばしい匂ひのあるやうな晩であつた。紫色に暮れた都會の空には、薄いヴーエルのやうな靄が軟らかに流れてゐた。

Y――の部屋の明け放した窓からは、椎の若芽のやうな植物性の匂ひ

が絶え間なく流れ込んだ。肌にさはる空氣には乳のやうな柔かい感じがあつた。その夜Y――は久しぶりでほんとうの自分の身體の存在を知るやうに思つた。

『あゝ、いゝ晩だ！』

彼は幾度か繰りかへしてから云つた。

『ほんとにいゝ晩ですことねえ。こんな晩には縁日へでも出かけるといゝんですよ。』

女もしみ〴〵と云ふのであつた。

『俺はまたこんな晩に死にたいやうな氣がする。』

と、彼は心の中に思つた。けれども流石に言葉に出して云ふ事は出來なかつた。

裏とは云つてもそれは人通りの多い賑やかな街であるが、その夜は宵の中から靜かに更けて行くやうであつた。M――工場の輪轉機の音は、まだ暮れない中から引きつゞいて遠い浪の音のやうに聽こえて來た。その音にじつと耳を傾けてゐると、家の壁や柱などが絶えず快く搖れてゐるやうに思はれた。電車の喧ましい音が消え去つたあひ間などには、すぐ後ろの濠を漕いで行く艪の音のきこえる事もあつた。ギイ――ギイ――、その濃い闇のやうに靜かな水の面を搔きわける音は、彼の心の深い底まで泌み渡るやうであつた。

『明日で俺は半歳のあひだ一日も休まない事になるんだぜ。』

不意にY――はかう云つて、珍らしくも其の蒼白い頰に微笑をたゞよはした。女は嬉しさうな顔をして、

『あァ、それぢァいつか云つたあの賞與とかがもらへるつてわけなんだね。』

『さうだ。――ことしァそれで一つ海岸へでも行きたいもんだなァ。何しろこの身體ぢやとても仕事なんか出來やしない。』

かう云つて、Y――は苦しさうに深い溜息を吐くのであつた。

『ほんとに早く癒してしまひたい。』

『この頃は何だ、俺があんまり默つてるもんだから、仲間の奴め憤つてでもゐると思つてゐるやうだ。……莫迦々々しい話だが、物など云つてちやァ一人前の仕事が出來なくなつちやつたんだ。』

Y――はかう云つて、苦しさうにいそがしく呼吸をつくのであつた。

彼の眼の前には過ぎ去つた昔の生活の幾つかの忘れがたい記憶が甦るのであつた。併しそれ等のものは、いづれも何の色もなく、また音もなく、たゞどす黒い死の海が空しく遠く過去にひろがつてゐるやうであつた。その中から幾らかのなつかしい光を探さうとしても、冷たい鼠色の布のやうにぼんやりとしてゐる忘却の中には何物も見えなかつた。

彼の昨日の生活は彼の今日の生活と少しも變る處が無かつた。一つの瞬間が過ぎ去つて了ふ時は、その次の瞬間はまた前と同じやうに單調に

くりひろげられて來るのであつた。彼の眼の前にはいつも塵埃とインキとによごれた數萬の眼のやうな活字があつた。そして彼の頭の中には――過ぎ去つた六七年このかた、たゞ一本の灰色の紙の巻きほぐれて行くやうに、そこにゐる其の女が住んでゐた。

『俺はなんにもしてゐないんだなァ。』

と、Y――はしみ〴〵と思つた。彼にも若い日の心地よい健康や、身體の内部から躍り出してくるやうな元氣などがあつたのであるが、そんな物はもう全く記憶のそとに消え去つてゐた。彼の身體は――生れながらにさうであるかのやうに、いつもだるい身體であつた。その皮膚には彈力が無くなつて、いつもかさ〳〵と荒んだ冬の野のやうであつた。

併しY――の心には、いつの間にか靜かな安心が住んでゐた。彼の心は、いつも深い水の底に生きてゐるやうに落ちついてゐた。彼の上には青い水の中にさし入るやうな動かない光が流れてゐた。

その夜更けてから、彼は窓の下を通る支那蕎麥の笛の音を、曾てないほどしみ〴〵ときいた。そしていつまでも〳〵ひとりで床の中に眼醒めてゐた。彼の頭は亞鉛塀に降る細い雨の音をきいてゐるやうに微かに痛むのであつた。眼に見えにい白い膜が、次第に彼の身體を聖く包むやうに思はれた。

翌日は前の日にも増して明るい夏の日が街の上に流れてゐた。大空は久しぶりに水淺黄の水盤のやうに拭ぐはれて、日光のこまかい踊り子はその中に一ぱいに滿ちひろがつてゐるやうであつた。

Y――はこの朝になつて、とう〳〵起きる事が出來なくなつた。身體には全身に高い熱を持つて、頭は絶えずキラ〳〵した光の帽子を被つてゐるやうに惱ましかつた。それでもY――は窓の障子をすつかり明け放させて、青い空の方に顏を向けながらじつと眼を閉ぢてゐた。

女はまめ〳〵しく軟らかいたべ物をこしらへてすゝめたり、醫者から藥をとつて來て飲ませたりなどした。しかし彼は殆どそれ等のものを口に入れなかつた。

『ねえ、何か欲しいものはないの。』

女は心配さうに幾度かうきくのであつた。けれども彼はその都度首を振つて、たゞいらないといふ意味を示すのであつた。

時の經つに從つて、Y――の顏は次第に不思議な色に變るのであつた。瞳はだん〳〵大きく開いて動かなくなつた。そして折々唇のあたりに幽かな痙攣が起るのであつた。それでもY――は唸り聲一つ出さないで、頰のあたりには却て微笑のやうなものを漂はせてゐるのであつた。それが爲めに、女はたゞ心配さうに空しく樣子を見てゐるより外に仕方がなかつた。

晝頃になると、街の遠くの方から編笠を被つた笛賣りがやつて來た。

日は燒けるやうに街の屋根の上や、煉瓦の壁や、兩側の石甃の上に照つてゐた。通りを歩いてゐる人の樣子は、たゞ眼をあいてゐる儘眠つてゐるやうであつた。並木の柳はその細い枝をだらりと垂れて、これも暫く眠つてゐるやうに靜かであつた。それでも其の柳の蔭はなつかしい幾つかの日かげをつくつてゐた。

笛賣りの男は編笠に深く顏を隱して、その手製の笛細工を吹きながら、靜かに街の柳の影を流して歩いた。その笛といふのは吹きかたによつて蟬の聲や、蛙の聲を出す、極めて簡單な管であつた。併しその男の吹く調子は如何にも本物のやうな鳴き聲であつた。

『ミーン、ミン、ミン、ミー……』

その聲が、暑い日の輝いてゐる柳の樹の下などからきこえてくると、何びともほんとうの蟬が、この都會の大通りを訪づれたと、不思議に思ふほどであつた。

『みん〳〵が鳴いてるぢやァないか。』

二三時間も物を云はずに横つてゐたY――は、かう云つて、何物にか憧れるやうに耳を欹(そばだて)るのであつた。

『さうのようでございますね、こんな處でみん〳〵の鳴き聲がきかれるなんて珍らしい。』

女もかう云つて耳を窓の方へ向けるのであつた。

『ことしになつて蟬の聲はこれが初めてだ……。』

彼は忘れて了つた故郷の聲でもきくやうに、なつかしさうな顔をしていつまでも耳を欹てゝゐた。

空には折々縞のやうに細い雲の流れよることがあつた。けれどもそれは夢の翳の過ぎゆくやうにいつの間にか消えて了ふのであた。咽喉の太い汽笛の聲――鐵の上を走る重い物の響――石の碎ける音――多くの自働車の叫び聲――さういふあらゆる物の音が一緒になつて、絶えず都會の屋根の上を走り廻つてゐるが、それ等の複雜な音の一部がY――の部屋へも其の窓から忍び込むのであつた。Y――はそれ等の音や光に壓しつけられたものゝやうに、また或る大きな力の前にひれ伏した弱い小さな物のやうに、じつと床の上に横つてゐるのであつた。

『ミーン、ミン、ミン、ミーイ……』

編笠の男の吹く蟬の聲は、尙はいつまでもその界隈にきこえてゐた。

夕方になつてから、Y――の容態は急に惡るい方へ變つて行つた。顔の色はもう全く土色に蒼くかはつて了つて、そして顔面や手足に絶えず微かな痙攣をあらはしてゐた。

女は今更のやうに驚いて、ひとりで大きな聲を出したり、泣いたりして、うろたへてゐた。それでも宿の者に氣をつけられて、あはたゞしく醫者へ驅け付けたり、M――工場の同じ仕事仲間へ知らせに行つたりし

た。

間もなくY――の寢床は幾人かの友達や、醫者などによつて取り圍まれた。

『どうだ、しつかりしろ。』

などゝ仲間の者は一生懸命になつて呼び返さうとするのであつた。Y――は折々濁つた眼を大きく見開く事もあるが、一言も口をきかうとしなかつた。そして咽喉をごろ〳〵と鳴らして、何ものかに誘はれるやうに靜かに眼を閉ぢるのであつた。

Y――が長年住み馴れた部屋のまわりには、もうひし〳〵と黑い夜の色がとりまいてゐた。晝間の中に乾きゝつた空氣は、いつの間にか濕つぽく濁つて來て、棺桶の蓋をするやうに、この部屋を塗りこめやうとするのであつた。

隣りの敎會の高い屋根の上から、少し隔つてゐる濠割の方へかけて、頻に五位鷺が鳴いて行つた。

長い沈默がこの世の中に來たやうに思はれた。部屋の中にゐる者はみんな聲を飲んで、白い手術服に身をかためた醫者の手當てをじつと見つめてゐるばかりであつた。暗い電燈の寂しく照つてゐる部屋には、二三日前、女が緣日で買つて來た一鉢のフリヂアの花が、僅かに其の匂ひを放つてゐた。

詩　二十六篇

十月の朝

何となく腹だゝしく、惱ましく
心はくらく
もの事のはし〳〵の氣にさわる
十月の青い朝。

疲れたる神經は
チク〳〵と毛針に突かれ、
薄く且つ痛める皮膚は
粟立ちて微かにうづく。

かゝる朝、青疊足に冷たく、
椅子の背も骨だちて着物にいたし。
金ペンの光はひえて
しみ〴〵と指先に泌む。

わが心に染まぬものみな亡べ！
かの銀のメスのごとく

快く刺すものゝあれ、など思ふ、
何となく腹だゝしく、惱ましき、十月の朝。

剃刀の刄

床屋の鏡のつめたさよ。
剃刀の刄のつめたさよ。

薄い光の流れ入る
寂しい朝の店にゐて

髯を剃らるゝ快よさ。
石鹸の泡の一刷毛を
襟にぬらるゝひやゝかさ、
毛孔はふるへ、眼をさます。

朝の鏡のつめたさよ。
剃刀の刄のつめたさよ。

クロバーの上

クロバーの上

海岸のクロバーの上に座し、
落つる日の紅きを見れば、
靜かなるわが心は、
ゆれうごく潮とともに鳴る。

「疲れたるわが生よ！」
かく思ひ、うなだれて、足許を見つむれば、
クロバーの青い葉の、綠の中に、
くる〳〵と、幾つかの赤い太陽！

秋

月島の入江に並ぶラッコ船は、
來るべき冬の國
北の海を夢みて靜かにまどろむ、
そのマストに紅い秋の日。

秋の日はまた、
大川の胸に鳴る齒車の
浚渫船の鐵の錨に、

懷しくしみ〴〵と泌みわたる。
熱を病み赭く濁つた河の水は、
この日から深く澄み、
小蒸汽のプロペラは、
さかしげに、快く、その水をかく。

虫の聲

おそ夏の街の夜更けに、

隣の高い石垣の間で虫が鳴く。
ある獨逸の名高い哲學者が
ガラス玉を磨くやうに、
きち〳〵と、單調に「鉦叩き」が鳴く。

白粉の斑らにはげた女の寢顏、
露はな白い胸の醜い鳥肌。
——郊外の林には、消えて行く汽車の遠鳴り。

白壁

街裏の堀に舟を押せば、
ひき汐の水は
いそがしくひた〳〵と舟脚を洗つてゆく。

水際の白壁の家の窓から
女の顔、
ニス色の水の底から、
ぷく〳〵と雲母色の氣泡がわく。

心の奥

肺を病む若い娘の、
眞白な胸に鳴る、
水泡音の靜かな響、音のない音。
その音に似たる愁ひが、
わが胸の底の底にて、
晝も夜もフッ〳〵と鳴る。

病院の闇の小窓に、
ひそ〳〵と暮ひよる、
眞黑な死の使ひ、喪服のしらせ、

その色に似たる嘆きが、
わが胸の暗き奥にて、
たえ間なくひとり呟く。

七つの帕の舞

ヘロッドの繼娘、美しくいサロメは舞ふ、
白い手に七片の帕をもて。
舞臺には炬火の烟が流れ、
バルコンの後ろの闇に、
月は照る、死人の如く欠呷して、
其の前に姫は舞ふ、しなやかに、しとやかに。
ユダヤ人、アッシリヤ人、
金色の盾をおき、銀色の矛を棄て、
足許に寢ころびて、
蛇の如く首をあげ、白い手の行方を追ふ。
ヘロッドの繼娘、美しいサロメは舞ふ、

七つの帕の舞

白い手に七片の帕をもて。

素裸體の乳のふくらみ、
頸飾り、胸飾り、寶石のふれあふ響。
老王は醉えるが如く、拘攣る如く、
青い眼を瞬き、時にまた唸き苦しむ。

豫言者の黒人に斬らるゝ夜、
ヨカナンの生首に、ばら色の唇のふるゝ夜、
何事もないやうに、

天井のテントには、桃色の電光が照る。
ヘロッドのまゝ娘、美しいサロメは舞ふ、
白い手に七片の帕をもて。

（横濱、ゲイテイ座印象）

『美はしきエレン』

「美はしきエレン」の曲は
靜かなる海の水の寄するが如く、

「美はしきエレン」

「美はしきエレン」

或は又旋風の唸るが如く、
樂堂の天井に、白壁に、はねかへる。

眼を閉づれは、わが腦は微かに疼き、
網膜に火の輪は映る。
夏の日の暑き晝寢に、
耳近く群る蚊の
呟きつ、遠のきつ、もつるゝ氣わい。

黑きかな、黑きかな、

樂壇に落ち散る木の葉。
夜の如く、五位鷺の如く、また吾が心の如く、打ちしめり、
しめやかに絃を彈つ、
其の聲の悲しき叫び！

また見よ聽衆の愁へる顏を、
その黃なる皺める頰を。
感激も、興奮も、遠き日に忘れ去り、
犬の如き屍體となりて、
默然と椅子にうなだる。

「美はしきエレン」

セロは鳴る、ボウボウと、
キオリンは女樂師の、喪の袖の白き襦袢に、からまりて頻にうめく、
色のない樂堂を悲しむ如く、
或はまた廣やかなる大空を戀ふるが如く。

過ぎし日のわが心よ、
爭ふて別れたる戀人よ、
瘠せし人、蒼くして幽靈の如き人——
吾が腦は今はシネマか、痛し〳〵、

銀笛か、クラリネットか、吹き破れ、吹き破れ。
「美はしきエレン」の曲は
靜かなる海の水の寄するが如く、
或は又旋風の唸るが如く、
樂堂の天井に、白壁に、はねかへる。

窓の夕陽

吾が胸のかくも鳴りしは、

何故か知るによしなし。

彼の長き睫こそ、かの深き瞳こそ、
否、否、否、
彼の銀の高きソプラノ、
否、それも知るによしなし。

P夫人はピアノに坐り、
唱歌者は、つゝましく樂壇に立つ。
はにかみて稍々赧き眼のほとり、

ふくやかに肥りたる色黑き頰。

暮近き森の樂堂、
一時は明るくひかり、
やがてまた沈みて暗し
顫え、泣く、咏嘆詞につれて。

落つる日は窓越しに射し、
唱歌者の裳裾を這ふて、
今ぞ照る、其の胸に、その黑き喪服の袖に、

遁れゆく美くしき聲を慕ふて――
吾が胸のかくも鳴りしは、
何故か知るによしなし。

十二月の朝

一

わが心は停車せる瞬間の靜けさを思ひ、
窓ごしに射し入る日光をなつかしむ時、
車掌は呼ぶ、聲高く――「S――門外」と。

嗚呼十二月の晴れ渡る冷たき朝よ。
水晶を張りのべしその皮膚に
わが眼は痛み、心臓も、胃の底も、
將た心の奥も、諸共にかすかに疼く。

撒水車は音もなく過ぎて行く、
そのあとを冬の日は尊く照らし、
濡れし地は、ながゝと線路に沿ふて、
快くしみ〴〵とその光を吸ふ。

物の象(かたち)は堅くして鮮かに、
某(なにがし)の官廳の圓屋根は明るく光り、
旗ふりの手に持つ旗も、
はつきりと浮み出す、赤と、綠と。

わが皮膚は熱を病み、わが心はまどろみ、
かくてまた電車にゆれて、
過ぎてゆく……日比谷のほとり。

水禽の群

木の葉は落ち散りて水の底に沈み、
芝生は刈られて地の肌をあらはす。

冬となれば、
水鳥は入江の蔭にかくれ、
あるものは日を受けて芝生に眠り、
あるものは見捨てられたる魂の如く、
たゞひとり寂しく浮ぶ。